富山市埋蔵文化財調査報告４

富山市
鵜坂（うさか）Ⅰ（いち）遺跡
発掘調査報告書

２００５

富山市教育委員会

富山市

鵜坂（うさかいち）Ⅰ遺跡

発掘調査報告書

２００５

富山市教育委員会

例　言

1. 本書は、富山市婦中町鵜坂地内に所在する鵜坂Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、タカノ興発株式会社（代表取締役 高野亮俊）が施工する鵜坂地内住宅団地造成に伴うものである。富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもとに、タカノ興発株式会社の依頼を受け、山武考古学研究所が担当した。
3. 遺跡の所在地、調査面積、調査担当者、調査期間は下記の通りである。
   所　在　地　富山市婦中町鵜坂51番地２外
   調 査 面 積　4,480㎡
   調査担当者　平岡和夫　折原洋一　高野浩之　大橋忠昭
   現 地 調 査　平成17年5月22日～同年7月23日
   整 理 調 査　平成17年7月25日～同年9月30日
4. 本書の執筆は、下記の通りである。
   第Ⅱ章　堀内大介（富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員）
   第Ⅰ章　第Ⅲ～第Ⅵ章　第Ⅶ章　折原洋一
5. 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ（株）に依頼し、その成果を第Ⅶ章に掲載した
6. 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。
7. 発掘調査及び整理作業にあたり、下記の諸氏、諸機関にご教示とご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。（順不同・敬称略）
   江尻正夫
8. 発掘及び整理調査参加者は下記の通りである。
   野村保弘　野村有利子　高島市郎　藤田フミ子　谷文子　山崎なつ子　水上カナイ　青山森明
   篠川富範　小沢寅勝　吉村一義　沢井義明　内山澄子　柏島朋也　松本真由美　山田誠晃
   田中弘子　根本時子　池野睦恵　滝口幸子

凡　例

1. 本遺跡の略記号はUS-Iである。
2. 遺構の種別記号は次の通りである。
   掘立柱建物跡……SB　土坑……SK　井戸……SE　溝……SD　性格不明遺構……SX
3. 挿図中の方位は、座標北（世界測地系）を示す。
4. 本書の挿図の縮尺は下記の通りである。
   遺跡全体図　地区全体図　1/600
   遺構実測図　掘立柱建物跡 1/80　土坑・井戸 1/40・1/60　性格不明遺構 1/60・1/100
   遺物実測図　土器類・土製品 1/4　石製品・鉄器 1/2
5. 遺構・遺物実測図で使用したスクリーントーンは以下の内容を示す。

桂痕　　筒物痕　　内黒

第14図　B地区中世井戸・土坑 …… 19
第15図　B地区出土遺物 …… 19
第16図　C地区全体図 ……20
第17図　C地区SX01 …… 21
第18図　C地区古墳時代土坑 ……22
第19図　C地区溝（1） ……23
第20図　C地区溝（2） …… 24
第21図　C地区古墳時代出土遺物（1）…… 27
第22図　C地区古墳時代出土遺物（2）…… 28
第23図　C地区中世土坑 …… 29
第24図　C地区中世出土遺物 …… 30

写真目次

図版 1－1　A－1地区全景　東より
－2　A－2地区北部全景　東より
－3　A－2地区南部全景　南より
－4　A－3地区全景　東より
－5　A－1地区SK09　南より
－6　A－2地区SK10　南より
－7　A－2地区SK11　南より
－8　A－1地区SK12　東より
図版 2－1　A－2地区SK13　南より
－2　A－1地区SD52・56　南より
－3　A－1地区畑跡　東より
－4　A－1地区東端　南より
－5　A－2地区SD21～23　西より
－6　A－2地区畑跡　西より
－7　A－1地区SD57・65　東より
－8　A－2地区南部畑跡　南より
図版 3－1　B－1地区全景　西より
－2　B－1地区全景　東より
－3　B－2地区全景　西より
－4　B－3地区全景　西より
－5　B－3地区全景　東より
－6　B－3地区西部全景　南より
－7　B－4地区全景　西より
－8　B－1・2地区西部全景　南より
図版 4－1　B－3地区SB01　北より
－2　B－3地区SB02・SD88　北より
－3　B－2地区SB03　南より
－4　B－3地区SE01　東より
－5　B－3地区SK15　南より
－6　B－1地区SK16　北より
－7　B－3地区SX03　東より
－8　B－3地区SX03遺物出土状況　南より
図版 5－1　C－1地区全景　西より
－2　C－2地区全景　東より
－3　C－3地区全景　東より
－4　C－4地区全景　東より
－5　C－1地区SX01　北より
－6　C－1地区SK02　北より
－7　C－1地区SK03　北より
－8　C－1地区SK08　東より
図版 6－1　C－1地区SD09　東より
－2　C－1地区SD05　東より
－3　C－3地区SD07　南より
－4　C－2地区SD05　南より
－5　C－1地区SD08　東より
－6　C－1地区SD08　東より
－7　C－2地区SK04～07　東より
－8　C－1地区SD03　南より
図版 7　出土遺物（1）
図版 8　出土遺物（2）

目　次

例言・凡例・目次
Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
1　地理的環境 …… 1
2　歴史的環境 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 4
Ⅲ　調査の概要 …… 4
1　調査の経過 …… 4
2　発掘調査の方法 …… 4
3　整理調査の方法 …… 6
4　基本層序 …… 6
Ⅳ　A地区 …… 7
1　概要 …… 7
2　遺構と遺物 …… 7
A　古代 …… 7
B　中世 …… 10
Ⅴ　B地区 …… 13
1　概要 …… 13
2　遺構と遺物 …… 13
A　古墳時代 …… 13
B　古代 …… 16
C　中世 …… 17
Ⅵ　C地区 …… 19
1　概要 …… 19
2　遺構と遺物 …… 21
A　古墳時代 …… 21
B　古代 …… 28
C　中世 …… 29
Ⅶ　自然科学分析 …… 31
Ⅷ　総括 …… 35

図版目次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第2図　明治43年大日本帝國陸地測量部迅速図 …… 3
第3図　調査区域図 …… 5
第4図　基本層序 …… 6
第5図　A地区全体図 …… 8
第6図　A地区古代土坑 …… 9
第7図　A地区古代溝・畑跡 …… 11・12
第8図　A地区出土遺物 …… 13
第9図　B地区全体図 …… 14
第10図　B地区SX03 …… 15
第11図　B地区SX03出土遺物 …… 16
第12図　B地区SD87 …… 16
第13図　B地区SB01～03 …… 17

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

鵜坂Ⅰ遺跡は、富山県富山市西部の神通川左岸沿いに位置する。なお、合併以前においては婦負郡婦中町に属していた地区となる。遺跡のある地域は東を神通川に、西～北を呉羽山丘陵に、南を神通川扇状地に囲まれた低地帯で、この低地帯の中央には神通川支流の井田川が西南から東北方向に向かって走流する。この井田川と神通川に挟まれた地区に本遺跡は立地する。当地区には南東から北西方向に走流する神通川の旧河道が複数認められ、神通川の氾濫を受けやすい地形を呈していたことが理解できる。

遺跡内は、神通川沿いの低地帯とその西側に接して南北に走向する台地からなる。低地帯は現状においては平坦となるが、平成10年度の試掘調査の結果より神通川沿いの東側に微高地（今回の調査範囲の東部）が、その西側（調査範囲の中央部）に埋没した旧河川が確認されており、さらにその西に南北方向に走向する台地（調査範囲の西部）が存在する。また、西部の台地の西側には旧神通川の河道が走流している。調査区はA～Cの3区に分かれており、A区は調査範囲北東部の微高地上に、B区は調査範囲西部の台地上に、C区は調査範囲南東部の微高地上に立地する。

2　歴史的環境

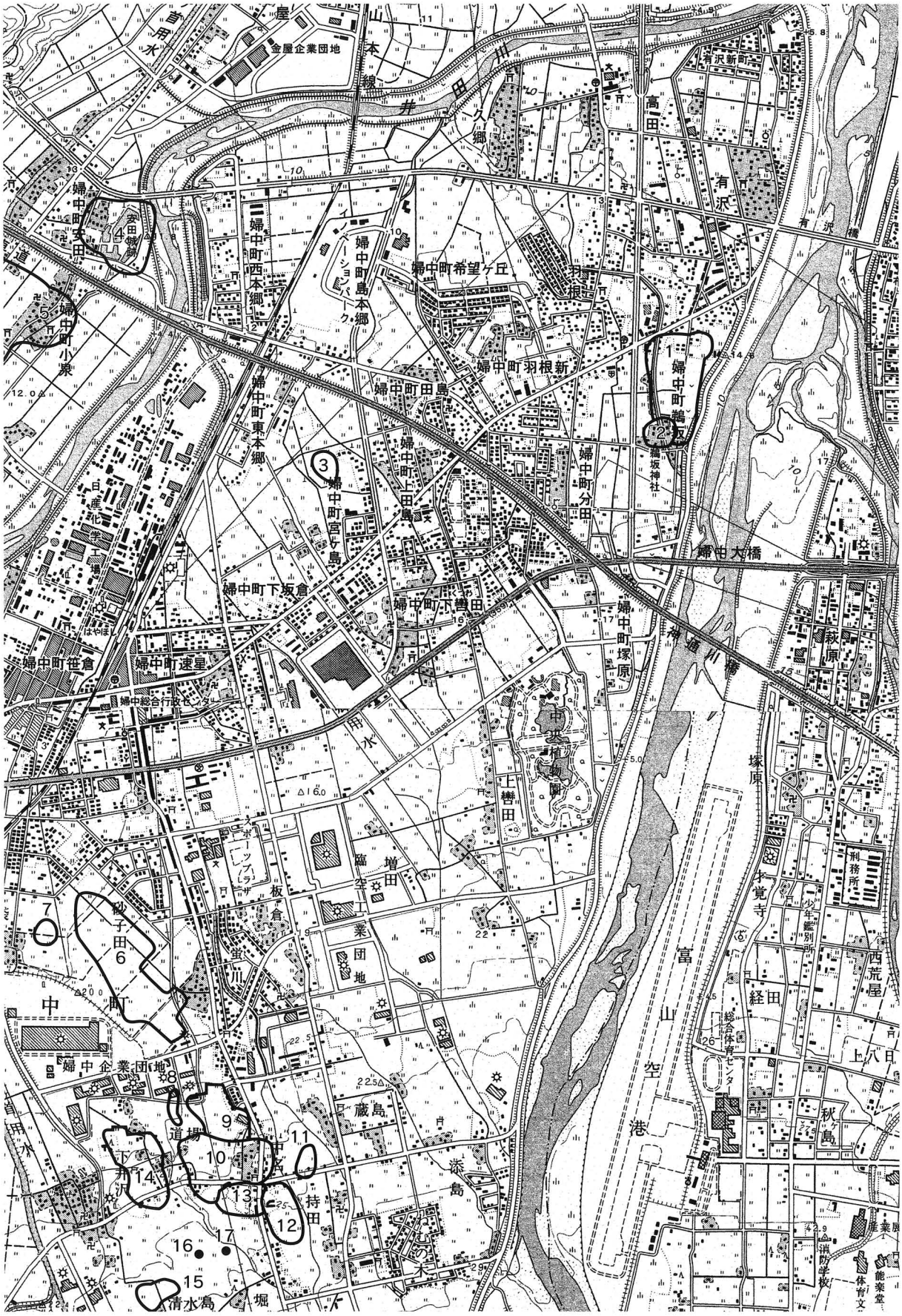
周辺は、旧石器時代から中・近世までの各時代の遺跡が存在するが、その分布は時代ごとに偏在性が認められる。

旧石器時代から縄文時代中期にかけては、本遺跡の北～西方に存在する呉羽山丘陵や射水丘陵裾部台地上に集中して分布し、縄文時代晩期では神通川の東の扇状地から低地に分布している。

弥生時代から古墳時代にかけては、沖積低地にも集落遺跡が見られるようになり、本遺跡の北～西方の丘陵上に、「国指定史跡」王塚古墳・勅使塚古墳・千坊山遺跡群・杉谷古墳群など多くの古墳・墳丘墓が構築され、県内でも有数の古墳密集地域となっている。王塚古墳・勅使塚古墳は県内最古級の大型前円後方墳で、それより先行する時期の千坊山遺跡群・杉谷古墳群は山陰地方との文化接触を物語る四隅突出墓を中心とした墳丘墓が検出されている。古墳時代後期には呉羽山丘陵斜面に横穴が構築されるようになる。

古代では、低地部にも多くの集落が形成されるようになり、律令期の国郡制のもとでは婦負郡の郡域に相当する。婦負郡は「和名類聚抄」によると十余の郷名が知られるが、史料的に裏付けられる例は少なく、平城京出土木簡により川合郷のみ確認される。川合郷はその名称由来より神通川や井田川・山田川の合流点が想定され、本遺跡周辺はその候補地のひとつとなる。本遺跡の名称となる鵜坂という地名は万葉集の中で越中守大伴宿祢家持が詠んだ「婦負郡の鵜坂河の辺りにして作る歌一首」に見られ、当地にある鵜坂神社は『延喜式』の神名帖に式内社として記載されている。

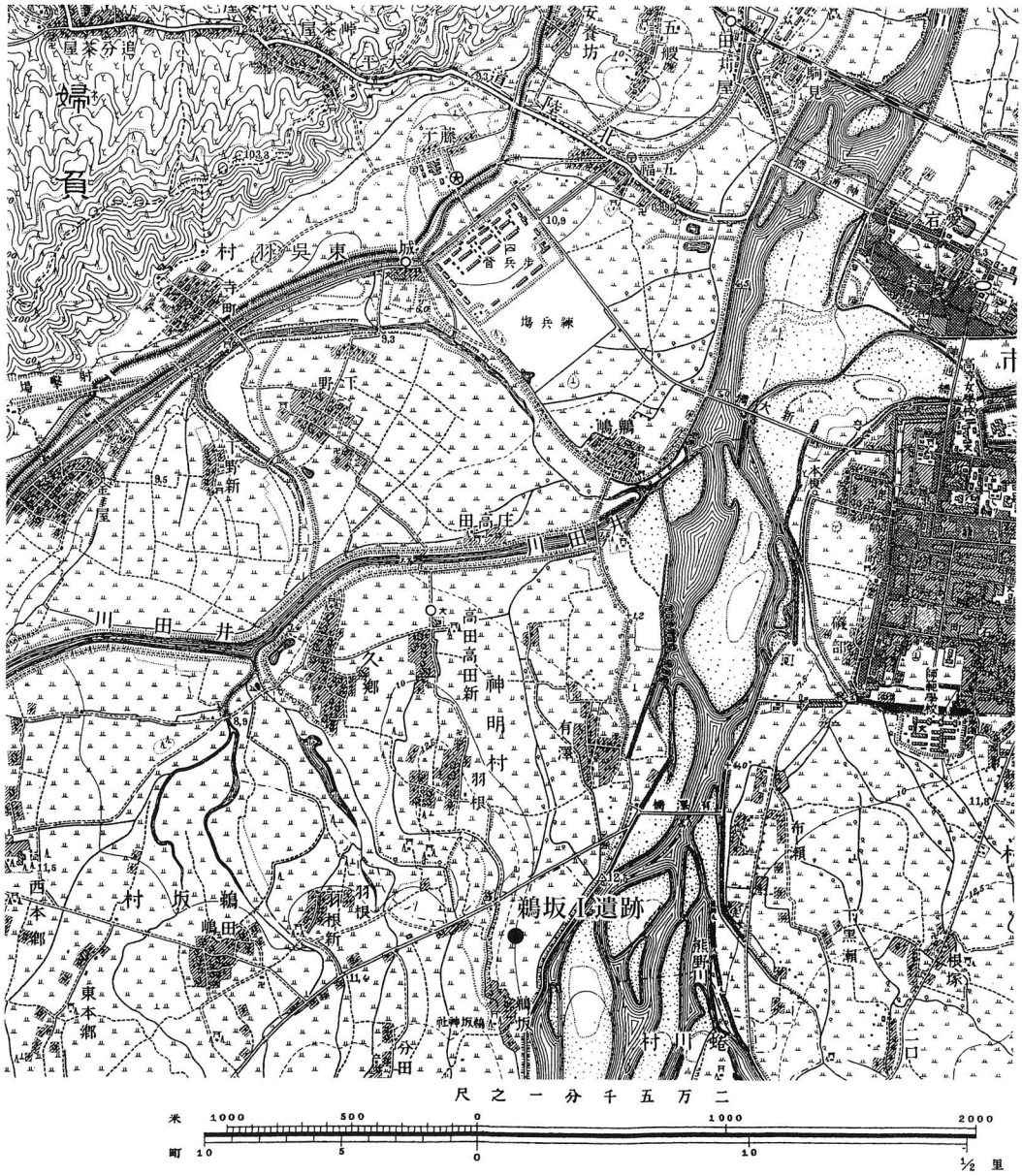
中世になると、本地域は新潟県小千谷市魚沼神社所蔵の大般若経嘉慶二年(1338)五月付の奥書「婦負郡宮河荘鵜坂社」などによって徳大寺領宮河荘の荘域内と推定される。推定される宮河荘内の中世遺跡としては本遺跡南方に所在する清水島II遺跡、中名I・II・V・VI遺跡、持田I遺跡、道場I遺跡、道場II遺跡等が知られ、そのうち道場Ⅰ遺跡では中世荘園の物流拠点的遺構群が検出されている。また、中世城郭では、豊臣秀吉が佐々成政を攻めた際の陣営となった白鳥城、その支城の安田城（国史跡）や大峪城などが存在する。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1:25,000）

第1表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	時　代	種　別	番号	遺跡名	時　代	種　別
1	鵜坂Ⅰ遺跡	古墳・古代・中近世	集落・生産址	10	中名Ⅴ遺跡	古墳・古代・中近世	集落
2	鵜坂寺跡	中世	社寺	11	持田Ⅰ遺跡	古代・中近世	集落
3	宮ヶ島Ⅱ遺跡	中近世	散布地	12	中名Ⅱ遺跡	古代・中近世	集落
4	安田城跡	中近世	城館	13	中名Ⅰ遺跡	古墳・古代・中近世	集落
5	友坂遺跡	縄文・古代・中近世	集落・城館	14	道場Ⅰ遺跡	中近世	集落
6	砂子田Ⅰ遺跡	古墳・古代・中近世	集落	15	清水島Ⅱ遺跡	中近世	集落
7	袋遺跡	古代	散布地	16	堀Ⅰ遺跡	中近世	墓・塚
8	道場Ⅱ遺跡	中近世	集落	17	堀Ⅱ遺跡	近世	集落
9	中名Ⅵ遺跡	古代・中近世	集落				



第２図　明治43年大日本帝國陸地測量部迅速図（1：25,000）

Ⅱ　調査に至る経緯

鵜坂Ⅰ遺跡は、平成7年に婦中町教育委員会が実施した県営公害防除特別土地改良事業に先立つ分布調査で、新たに発見された。

平成9年3月、婦中町が「婦中町都市計画マスタープラン」を策定し、鵜坂地区において民間会社による住宅団地造成の推進を図った。これに基づきタカノ興発株式会社による分譲宅地造成が計画された。

婦中町教育委員会では、タカノ興発株式会社の依頼を受け、平成10年6月29日から11月5日にかけて58,295㎡を対象に試掘確認調査を実施した。調査は株式会社シン技術コンサルへ委託して行った。調査の結果、19,500㎡の遺跡範囲を確認した。

これを受けて協議を重ねた結果、道路敷部分4,480㎡について緊急に発掘調査が必要と判断された。発掘調査は民間発掘調査会社に委託して実施することで合意し、タカノ興発株式会社主体者と婦中町教育委員会との間で平成17年3月25日に協定を締結した。

４月１日、婦中町は周辺６市町村と合併し、「新・富山市」が誕生した。これを受けて、調査は富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと、5月22日から着手することとなった。

（堀内大介）

Ⅲ　調査の概要

1　調査の経過

発掘調査は、平成17年5月22日より開始し、同年7月23日に終了した。

5月期　Ｃ地区より重機による表土除去を開始する。

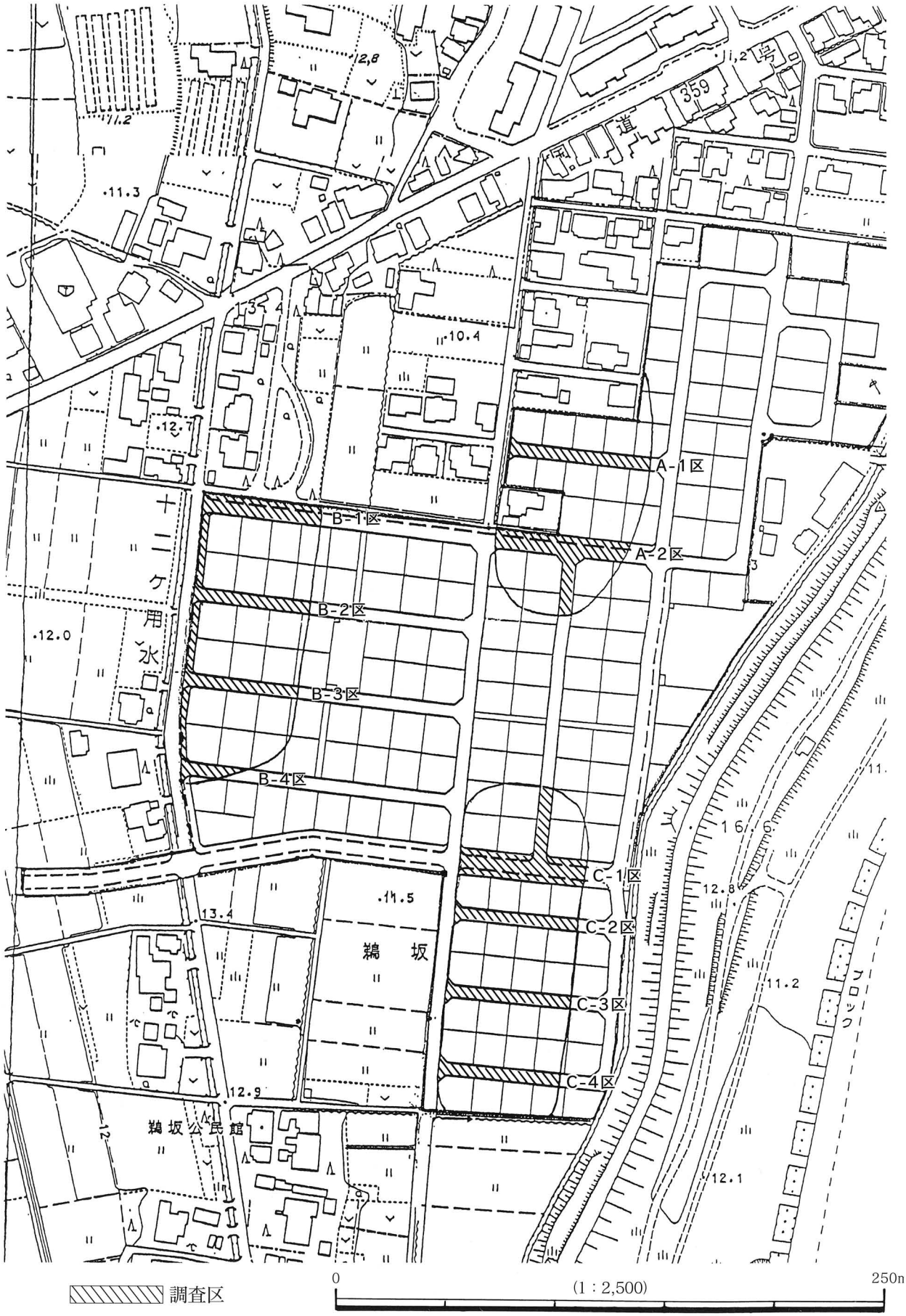
6月期　Ｃ地区の表土除去を終了し、遺構調査を実施終了する。Ａ地区の表土除去開始、遺構調査に入る。

7月期　Ａ地区の遺構調査を終了する。Ｂ地区の表土除去、遺構調査を実施、終了をもって全ての調査を終了する。

2　発掘調査の方法

発掘調査は、試掘調査の結果によって設定された調査区を対象として実施した。調査区内は遺構・遺物の分布状況及び地形的に3地区に分かれ、これらを北よりＡからＣの地区名を呼称し、さらに各地区は調査範囲単位に算用数字で1・2・・を付した。グリッドはＡ～Ｃ地区全てを覆うように公共座標(世界測地系)を用い10ｍ×10ｍを大グリッド、更にその中を2ｍ×2ｍの小グリッドを設定した。呼称方法は大グリッドを東西軸を西よりアルファベットでＡ・Ｂ・Ｃ・・・、南北軸を北より00・0・1・2・3・・・として西北の交点を代表させ、小グリッドは公共座標交点の下1桁を用いた。

表土は重機を用いて除去し、遺物包含層掘り下げ及び遺構確認作業は人力を用いて実施した。遺構平面図及び断面図の実測はデジタルデータを用いた。写真撮影は35㎜判白黒ネガ、35㎜判カラーポジ、6×7判白黒ネガを使用した。


A-1区
A-2区
B-1区
B-2区
B-3区
B-4区
C-1区
C-2区
C-3区
C-4区
鵜坂
鵜坂公民館
359
道
号
用水
調査区
0
(1：2,500)
250m

第３図　調査区域図

3　整理調査の方法

整理調査は、山武考古学研究所が発掘調査で得た資料・遺物を対象にして実施した。

出土遺物は細片に至るまで全量水洗いした後、インクジェットプリンターを使用して注記した。但し、注記不可能な微細片については注記したポリ袋に収納した。

4　基本層序

基本層序はA～C地区の各地区により異なる。

A地区

Ⅰ層　表土

Ⅳ層　暗灰褐色砂質土

Ⅴ層　暗灰褐土

Ⅵ層　黒褐色粘質土　古代包含層

Ⅶ層　黄灰褐色砂質土　遺構確認面

B地区

Ⅰ層　表土

Ⅰ′層　表土の酸化層

Ⅴ層　暗灰褐色土

Ⅵ層　黒褐色粘質土　中世遺物包含層

Ⅶ層　黄灰褐色砂質土　遺構確認面

C地区

Ⅰ層　表土

Ⅰ′層　表土の酸化層

Ⅱ層　褐色砂質土

Ⅲ層　灰褐色砂質土

Ⅳ層　暗灰褐色砂質土

Ⅴ層　暗灰褐色土

Ⅵ層　黒褐色粘質土

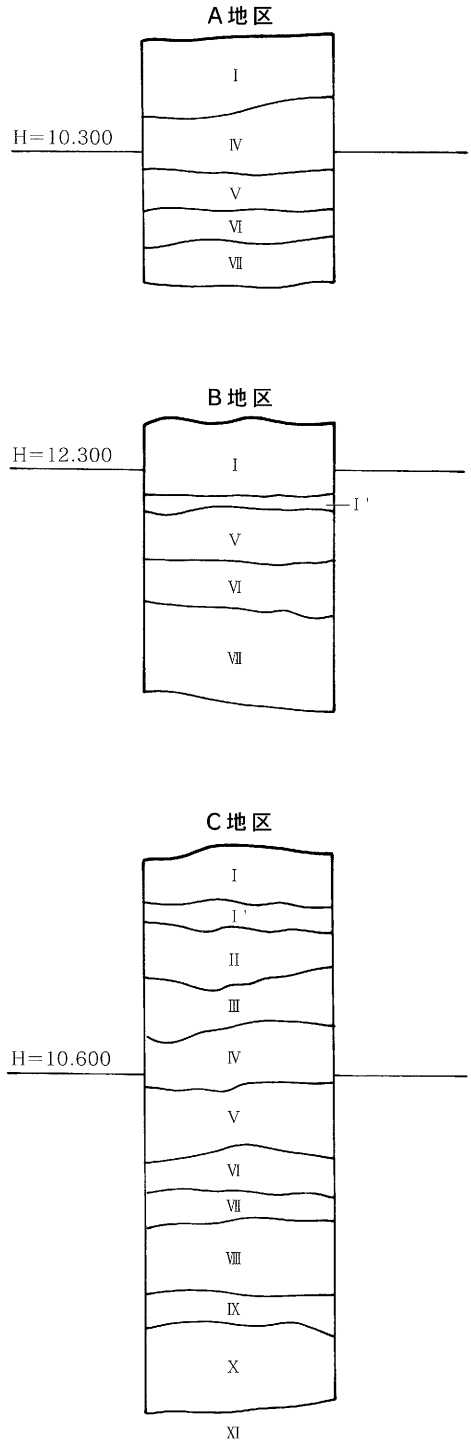
Ⅶ層　黄灰褐色砂質土

Ⅷ層　灰褐色砂質土

Ⅸ層　灰褐色土

Ⅹ層　黒褐色粘質土　古墳時代包含層

Ⅺ層　黄灰色砂層　遺構確認面



第４図　基本層序

Ⅳ　A地区

1　概要

A地区は、遺跡の北東部に位置し、A－1～3地区の3地区に分かれており、A－1・2地区では古代の遺構・遺物が、A－3地区では中世の遺物が検出されている。

2　遺構と遺物

A　古代

検出された遺構は古代の土坑5基・溝7条・畑跡が存在し、遺物は須恵器・土師器が出土している。

土坑

SK09（第6図　図版1－5）

T3区（A－1地区）に位置する。長軸長111cm×短軸長79cmの卵形を呈し、断面形は深さ35cmの鍋底状となる。古代包含層(基本層序Ⅳ層)下より検出され、古代のものと考えられる。

SK10（第6図　図版1－6）

Q7区（A－2地区）に位置する。長軸長112cm×短軸長105cmの不整円形を呈し、断面形は深さ45cmの鍋底状となる。重複関係は本遺構が畑跡により切られている。遺物は覆土中より土師器杯が出土している。

SK11（第6図　図版1－7）

R2区（A－1地区）に位置する。長軸長265cm以上×短軸長204cmの長方形を呈し、断面形は深さ7cmの皿状となる。畑跡およびSD65と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は覆土中より土師器・土錘などが出土している。

SK12（第6図　図版1－8）

P2区（A－1地区）に位置する。長軸長114cm×短軸長74cmの楕円形を呈し、断面形は深さ10cmの皿状となる。古代包含層(基本層序Ⅳ層)下より検出され、古代のものと考えられる。。

SK13（第6図　図版2－1）

R9区（A－2地区）に位置する。長軸長190cm×短軸長103cmの不整形を呈し、断面形は深さ18cmの皿状となる。古代包含層(基本層序Ⅳ層)下より検出され、古代のものと考えられる。。

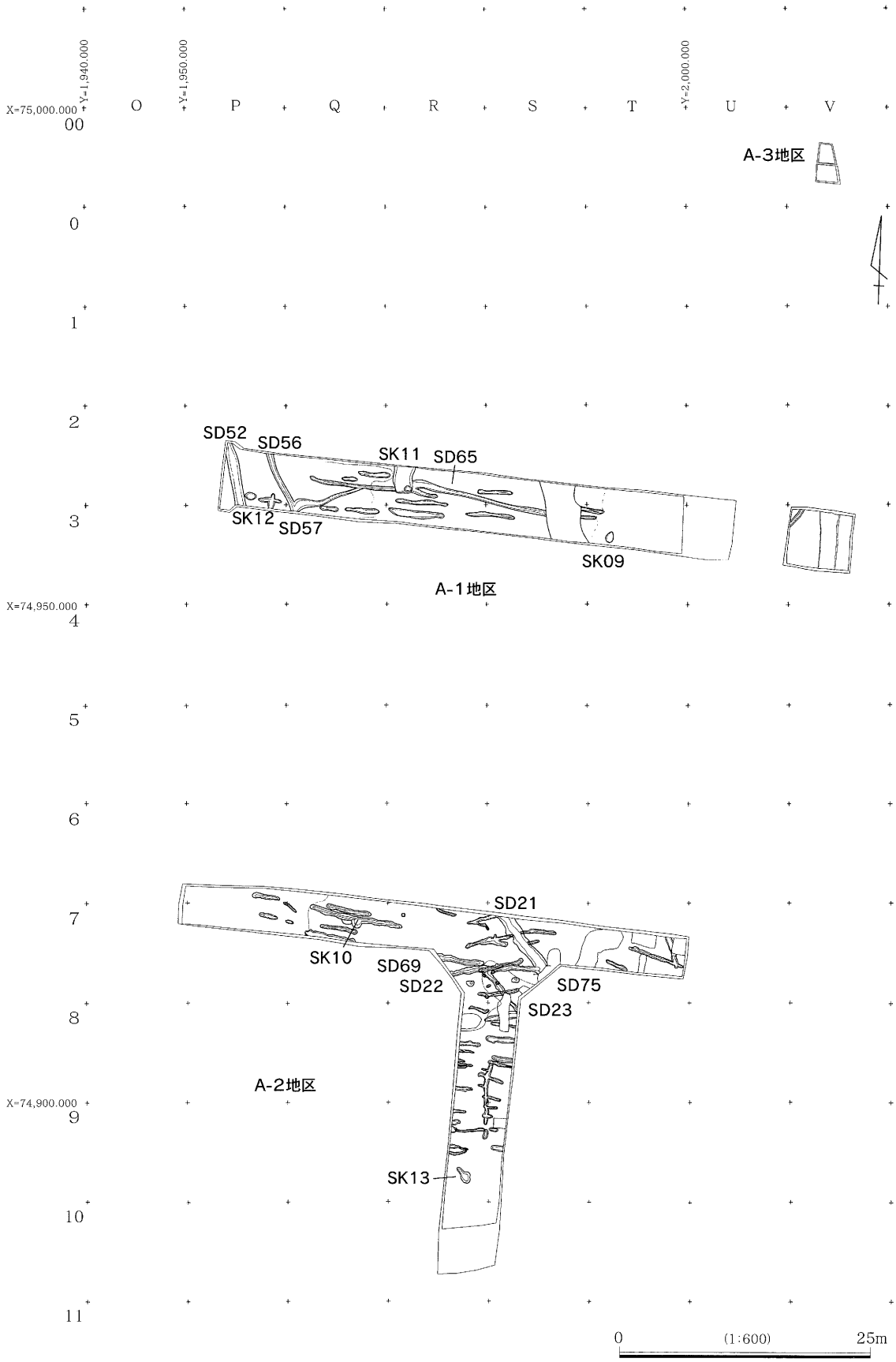
溝

SD21（第7図　図版2－5）

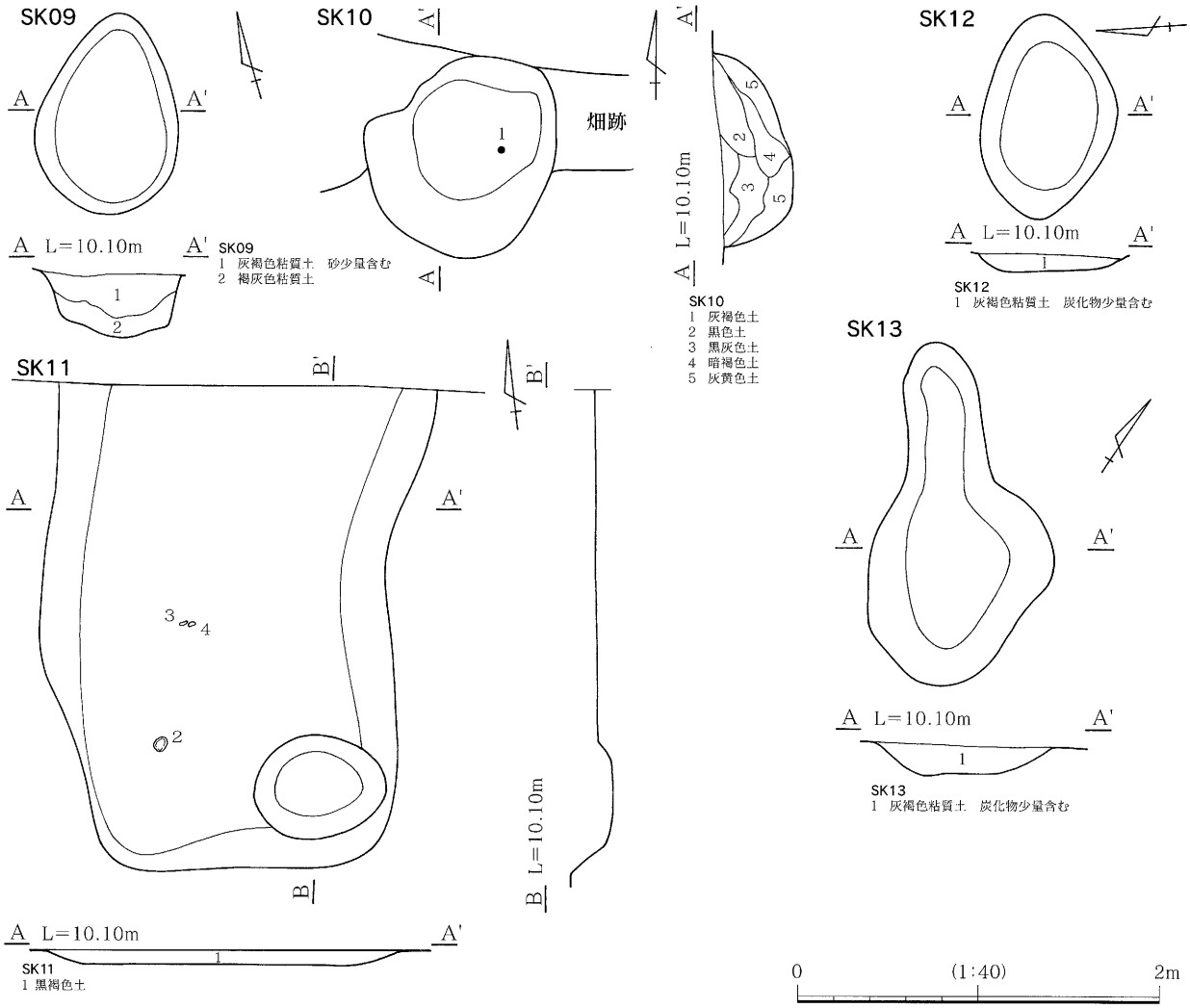
S7区（A－2地区）に位置する。北西～南東方向を直線的に走向し、南北両端は調査区外へと延びている。断面形は幅132cm×深さ15cmの皿状を呈する。重複関係は本遺構がSD22・畑跡を切る。遺物は覆土中より須恵器片が微量出土している。

SD22（第7図　図版2－5）

R～S7区（A－2地区）に位置する。東～西方向にやや弧を描き走向し、東西両端は調査区外へと延びている。また、調査範囲の中央部より南東方向に分岐するSD23は本溝と同時期と推測される。断面形は幅50cm×深さ12cmの皿状を呈する。重複関係は本遺構がSD21に切られ、畑跡を切る。遺物は覆土中より須恵器片が微量出土している。


Y=1,940.000
Y=1,950.000
Y=2,000.000
X=75,000.000
O
P
Q
R
S
T
U
V
00
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
X=74,950.000
X=74,900.000
A-3地区
SD52
SD56
SK11
SD65
SK12
SD57
SK09
A-1地区
SD21
SK10
SD69
SD22
SD75
SD23
A-2地区
SK13
0
(1:600)
25m

第５図　Ａ地区全体図



第６図　A地区古代土坑

SD23（第7図　図版2－5）

S7～8区（A－2地区）に位置する。SD22より分岐して北西～南東方向を直線的に走向し、南端は調査区外へと延びている。断面形は幅40cm×深さ12cmの皿状を呈する。重複関係は本遺構が畑跡を切る。

SD52（第7図）

P2区（A－1地区）に位置する。北北西～南南東方向を直線的に走向し、南北両端は調査区外へと延びている。断面形は幅105cm×深さ18cmの台形状を呈する。遺物は覆土中より土師器片が微量出土している。

SD56（第７図　図版2－7）

P2区（A－1地区）に位置する。北北西～南南東方向にやや弧を描きながら走向し、南端はSD57に接し、北端は調査区外へと延びている。断面形は幅50～65cm×深さ20cmの台形状を呈する。覆土は人為的に埋め戻された土層で、SD57覆土と同じである。

SD57（第7図）

Q2～3区（A－1地区）に位置する。西南西～東北東方向に走向する。溝の東端は畑跡に接する部分で消滅するが、本来は覆土が類似するSD65につながっていた可能性がある。溝西端は南方向に弧

を描きながら調査区外へと延びている。断面形は幅32～120㎝×深さ4～20㎝の皿状及び台形状を呈する。覆土はSD56と同質で、人為的に埋め戻された土層である。重複関係は本遺構が畑跡を切る。

SD65（第7図　図版2－7）

R～S2・S3区（A－1地区）に位置する。西北西～東南東方向を直線的に走向する。断面形状は幅35～70㎝×深さ5～20㎝の皿状を呈する。SK11と重複するが、新旧関係は不明である。

畑跡（第7図　図版2－3・6）

P～T2～3（A－1地区西半部）およびP～Q6・P～T7・R8～9・S8～9（A－2地区）に畑サク状遺構が検出されている。畑サクの断面形状は幅18～80㎝×深さ4～30㎝の「U」字状形を呈している。サクは長軸方向によりⅠ～Ⅴ群に分けられ、その分布範囲は群毎にやや異なる。また、各群には重複関係が認められるが、新旧関係を把握するには至らなかった。

Ⅰ群　長軸方向をN－5°－W前後とする群で、A－1地区のP～T2・P～T3およびA－2地区のR8～9・S8～9に分布する。

Ⅱ群　長軸方向をN－10°－W前後とする群で、A－2地区のP6・P～S7に分布する。

Ⅲ群　長軸方向をN－20°－W前後とする群で、R～S8およびT7に分布する。

Ⅳ群　長軸方向をN－85°－E前後で、R8～9およびS8～9にかけて1条存在する。

Ⅴ群　長軸方向をN－10°－W前後とする群で、R7～8およびS7～8に分布する。SD21～23に切られる。

遺物

SK10出土遺物（第8図　図版7）

1は土師器無台杯で、口縁部～体部は内湾して立ち上がり、底部切り離しは右回転糸切り無調整である。9世紀末から10世紀初頭と思われる。

SK11出土遺物（第8図　図版7）

2は土師器有台杯で、高い高台を有し、底部切り離しは回転糸切りである。9世紀末から10世紀初頭と思われる。3・4は土錘で、巻付け成形である。

SD21出土遺物（第8図　図版7）

5は須恵器双耳壺の肩部片と思われる。耳部が残る破片で、胴部外面は回転篦ケズリが施されている。

SD22出土遺物（第8図　図版7）

6・7は須恵器双耳壺の肩部片と思われる。6は横位と縦位の凸帯が認められ、内面には縦位の刷毛目が施されている。7は横位の凸帯が認められる。

SD52出土遺物（第8図　図版7）

8は須恵器無台杯で、口縁部が僅かに外反し、底部切り離しは右回転篦切りである。8世紀末と思われる

古代遺構外出土遺物（第8図　図版7）

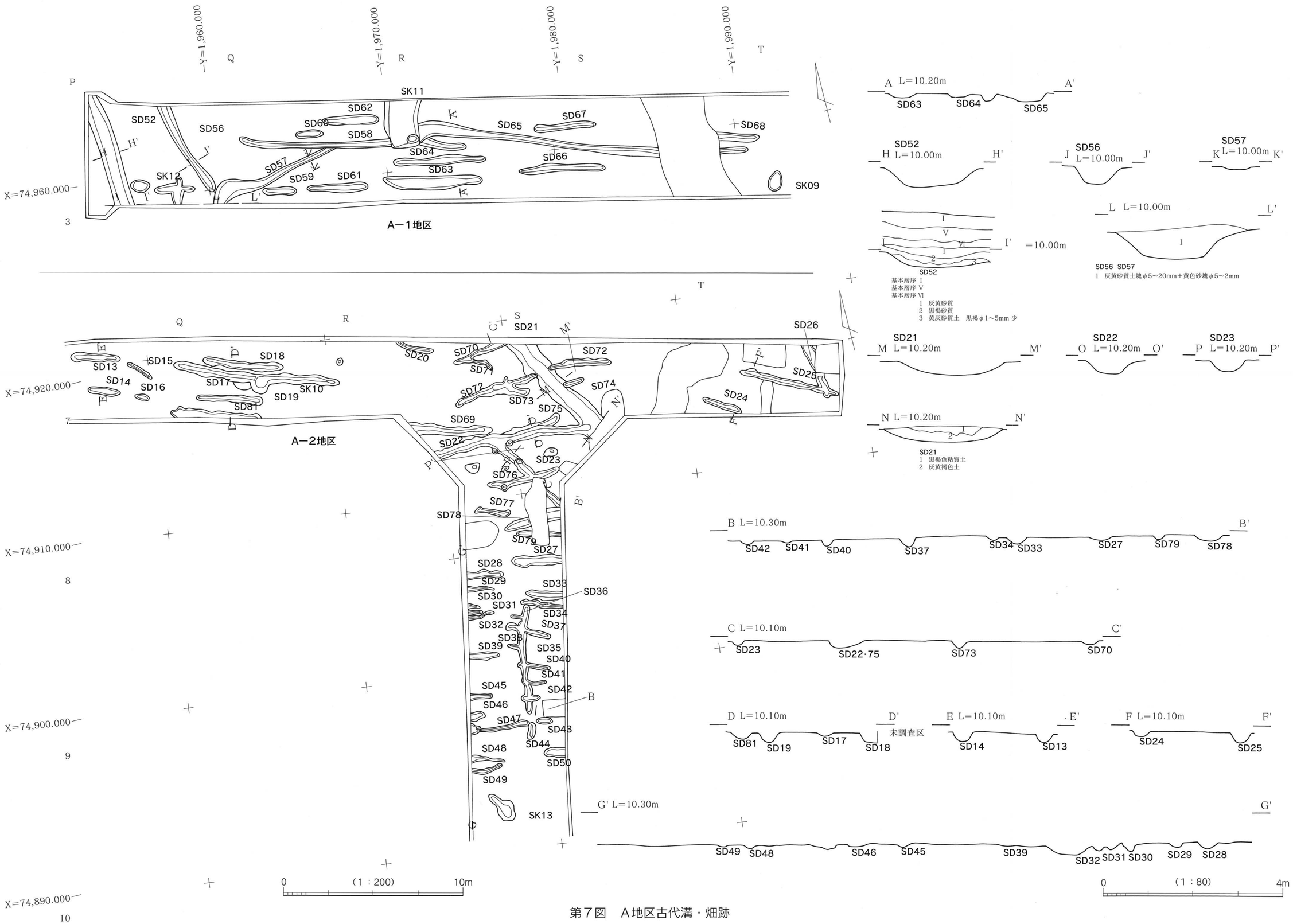
9は土師器杯で、口縁部に横ナデが施される。10世紀代と思われる。10は大型の土錘で、巻きつけ成形である。11は小型の棒状の土錘で、巻き付け成形である。

B　中世

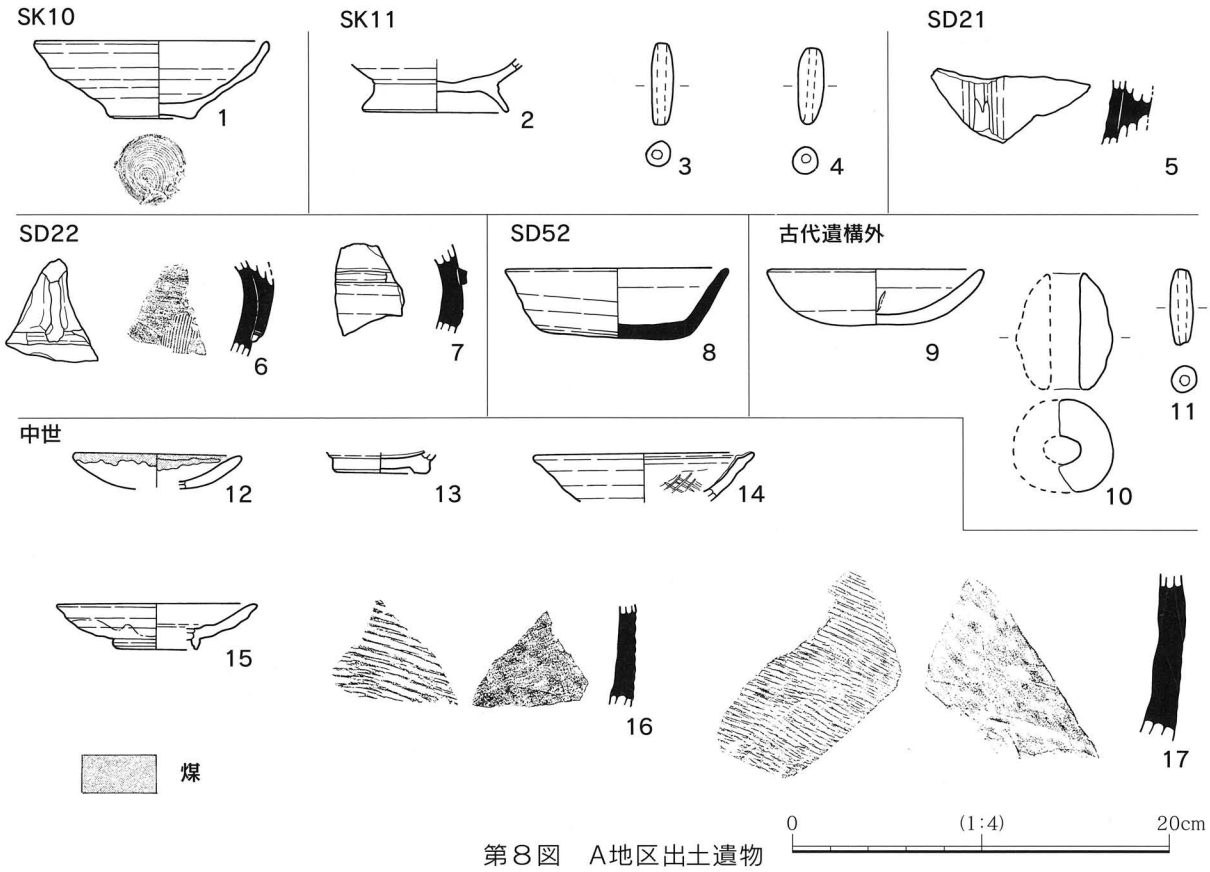
遺構は所在しないが、陶器等が出土している。

遺物（第8図　図版7）

12は中世土師器の灯明皿で、手捻り成形、口縁部内外面に煤が付着する。13は天目碗の底部片で、内面に鉄



第７図　Ａ地区古代溝・畑跡



第８図　A地区出土遺物

釉、外面が露胎となり、底部外面は右回転篦ケズリが施される。14は古瀬戸の卸し皿で、内面に灰釉、外面が露胎となる。15は信楽の皿で、内外面の上半部に藁灰釉が施釉される。16・17は珠洲である。16は珠洲Ｔ種壺で、外面に綾杉状の叩き、内面に刷毛目が認められる。17は珠洲Ｔ種甕で、外面に叩き、内面に無文当て目が見られる。

Ⅴ　B地区

1　概要

Ｂ地区は、遺跡の西部に位置し、Ｂ－1～4地区の4地区に分かれており、Ｂ－3地区東端部で古墳時代の遺構・遺物が、Ｂ－4地区で古代の遺構・遺物が、Ｂ－1地区西半部およびＢ－3地区西半部に中世の遺構・遺物が検出されており、SD82～86、SK18、SK19、SX02は近代以降の所産である。

2　遺構と遺物

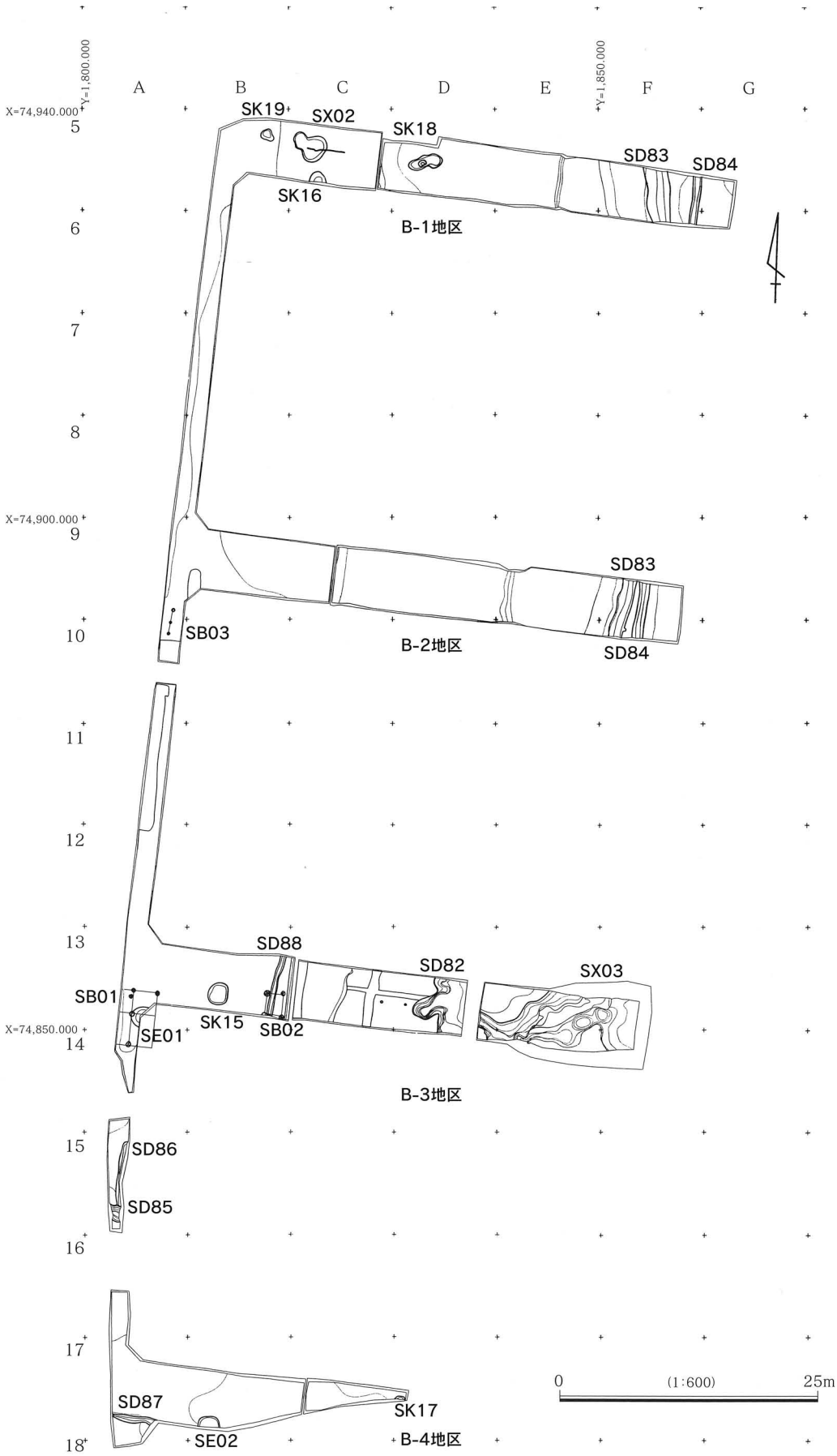
A　古墳時代

検出された遺構は、Ｂ－3地区に位置するSX03の1基のみで、遺物もここより出土した少量の土師器のみである。

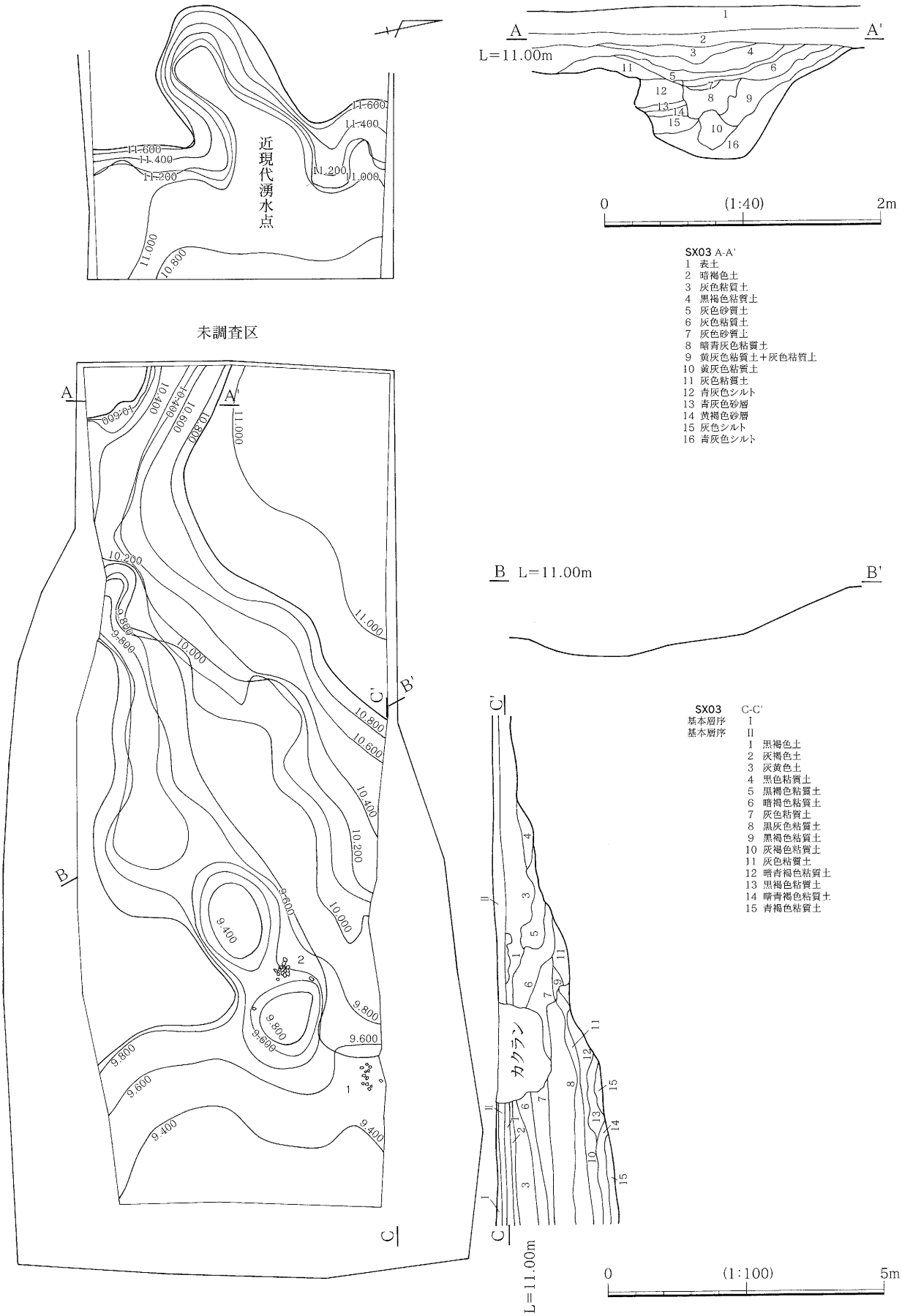
古墳時代湧水点

SX03（第10図　図版4－7・8）

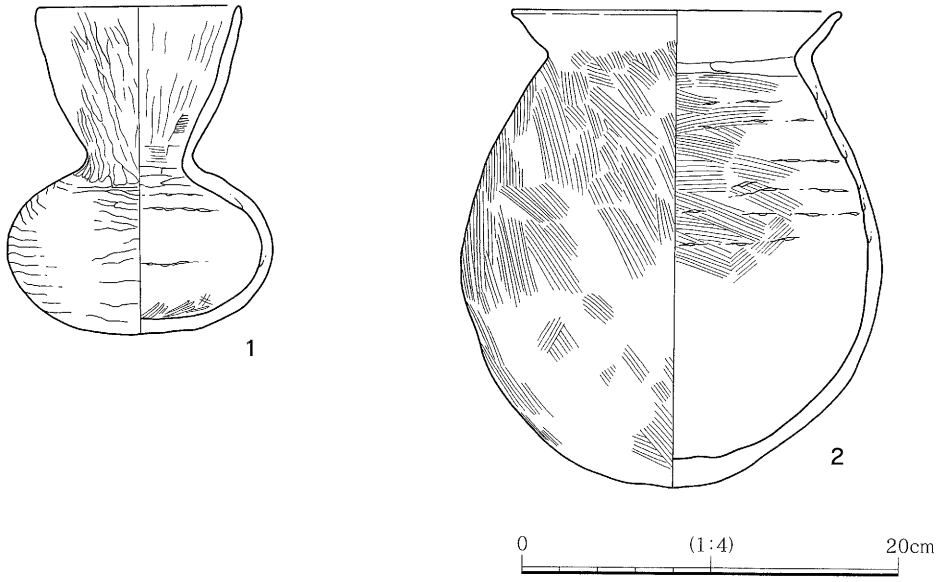
D～F13(Ｂ－3地区)に位置し、台地端部の崖から低地部にかけて立地する。本遺構は幅1.2～2.7ｍ×深さ0.3～0.7ｍの溝状遺構が東西長12.5ｍにわたって検出されたもので、その位置・形状及び現状においても湧水することから、古墳時代の湧水点と推測される。本遺構の西端は崖より内側の


Y=1,800.000
Y=1,850.000
A
B
C
D
E
F
G
H
X=74,940.000
X=74,900.000
X=74,850.000
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
SK19
SX02
SK18
SD83
SD84
SK16
B-1地区
SD83
SB03
B-2地区
SD84
SD88
SD82
SX03
SB01
SK15
SB02
SE01
B-3地区
SD86
SD85
SD87
SK17
SE02
B-4地区
0
(1:600)
25m

第９図　B地区全体図



第10図　B地区SX03



第11図　B地区SX03出土遺物

台地上に、東端は低地部に位置し、端部は開放されている。底面は全体として西から東に向かい低くなり、部分的に階段状や土坑状の落ち込みが認められ、覆土下半部には砂層や砂粒を多く含む土層が存在する。遺物は遺構の東半部の覆土中より土師器が少量出土している。

遺物

本時代の遺物はSX03から出土した土師器がある。

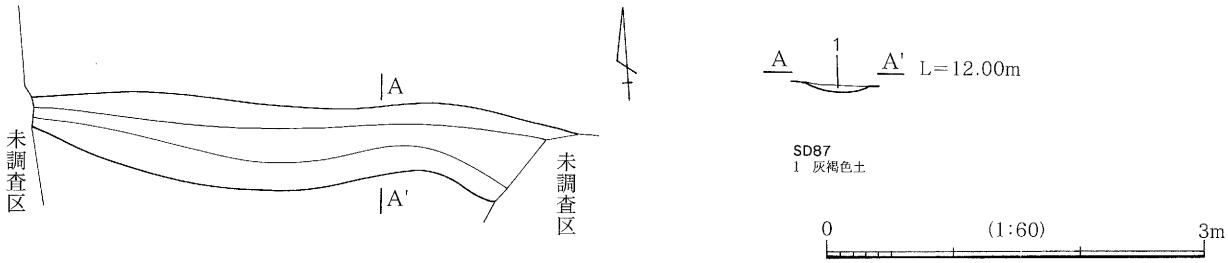
SX03（第11図　図版7）

1は土師器坩である。胴部は扁平な球形、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。整形は口縁部内外面に磨き、胴部外面に削り、胴部内面にナデが施される。2は土師器甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は最大胴径を下位に有し、丸底である。口縁部横ナデ、胴部外面斜位の刷毛目、内面に刷毛目を施している。

B　古代

検出された遺構は、埋没谷が存在したために古代包含層が残存したB－4地区に位置するSD87の1条だけで、遺物は数片の土師器細片が出土している。

溝



第12図　B地区SD87

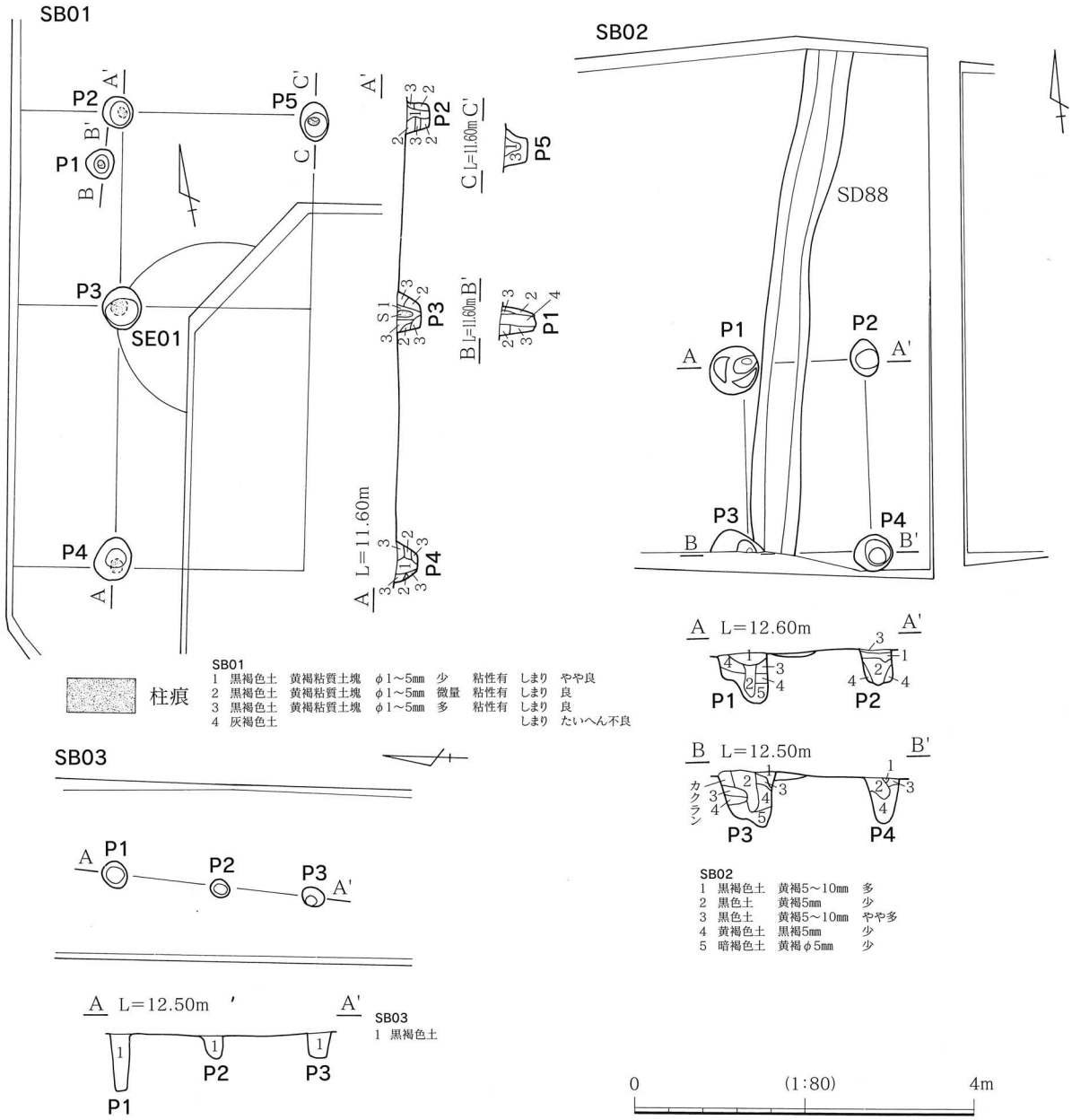
SD87（第12図）

A17区（B－4地区）に位置し、基本土層Ⅶ層を確認面とする。ほぼ東西方向に走向し、東西の両端部は調査区外へと延びる。断面形は幅45㎝×深さ5㎝の皿状を呈し、底面は僅かに東方向に下がる。

遺物の出土は皆無である。

C　中世

検出された遺構は、いずれも台地平坦面に立地し、Ｂ－１地区より土坑1基が、Ｂ－３地区より掘立柱建物跡2棟・井戸1基・土坑2基・溝１条が検出されている。遺物はそのほとんどが遺構内からで、中国輸入陶磁器・中世土師器が出土している。



第13図　B地区SB01～03

掘立柱建物跡

SB01（第13図　図版4－1）

Ａ13～14（Ｂ－3地区）に位置し、台地頂部の平坦面に立地する。本遺構は一部が検出されたに過ぎず、建物は調査区外の西部及び南東部に延びていると推測される。規模・形状は多くが調査区外と

なるため不明な点が多いが、東西長3.5m以上×南北長5.4mの1間以上×2間が確認されており、柱間は東西方向が2.25mで、南北方向が2.3～3.1mと南北方向が長いことから東西方向を桁行とする総柱建物と推定される。主軸方向はN-95°-Wである。調査された部分は建物の東部と思われ、P1が建物北東隅となり、南東隅及び西部は調査区外となる。柱は柱痕より見ると径15～20cm程で、掘り形は30～50cmの円形を呈し、またP3柱痕内より大型の礫が落ち込むように出土している。重複関係は本遺構のP3がSE01覆土を切っている。遺物はP4より白磁1点が出土している。

SB02（第13図　図版4－2）

B13（B－3地区）に位置し、台地頂部の平坦面に立地する。本遺構は一部が検出されたに過ぎず、東側は近現代の削平を受け消失したと思われ、南部は調査区外に延びていると推測される。規模・形状は不明な点が多いが、東西長2.2m以上×南北長1.5m以上の1間以上×1間以上が確認されており、柱間は東西方向が2.2mで、南北方向が1.5mと東西方向が短いことから東西方向を桁行とする総柱建物と推定される。主軸方向はN-87°-Wである。調査された部分は建物の北西隅と思われ、P1が建物北西隅となり、南西隅は調査区外で、東部は削平により消失していると推定される。柱は柱痕より見ると径20～30cm程で、掘り形は40～50cmの円形を呈している。重複関係は本遺構のP3がSD88の覆土を切っている。

SB03（第13図　図版4－3）

A9～10（B－2地区）に位置し、台地頂部の平坦面に立地する。本遺構は3本のピットが検出されたに過ぎず、建物ではない可能性も高いが、ここではSB03として取り扱う。規模・形状は不明であるが、南北長2.70mの間にピットが直線的に並んで3本検出されている。主軸方向はN-12°-Eである。ピット間は1.50～1.28mで、平面形は22～32cmの円形を呈し、深さは28～64cmである。

井戸

SE01（第14図　図版4－4）

A13区（B－3地区）に位置し、台地頂部の平坦面に立地する。平面形状は東半部が調査区外のため明確とは言い難いが、掘り形が径103cm×深さ125cmの円筒形と推定され、覆土下部には中央部に曲物等を埋め込んだ痕跡が認められるが、その規模法量は大半が調査区外となるため不明である。重複関係は本遺構がSB01に切られている。

土坑

SK15（第14図　図版4－5）

B13区（B－3地区)に位置し、台地頂部の平坦面に立地する。平面形状は長軸長216cm×短軸長194cmの楕円形を呈し、断面形状は深さ45cmの鍋底状を呈する。遺物は覆土中より中世土師器1点・珠洲焼1点が出土している。

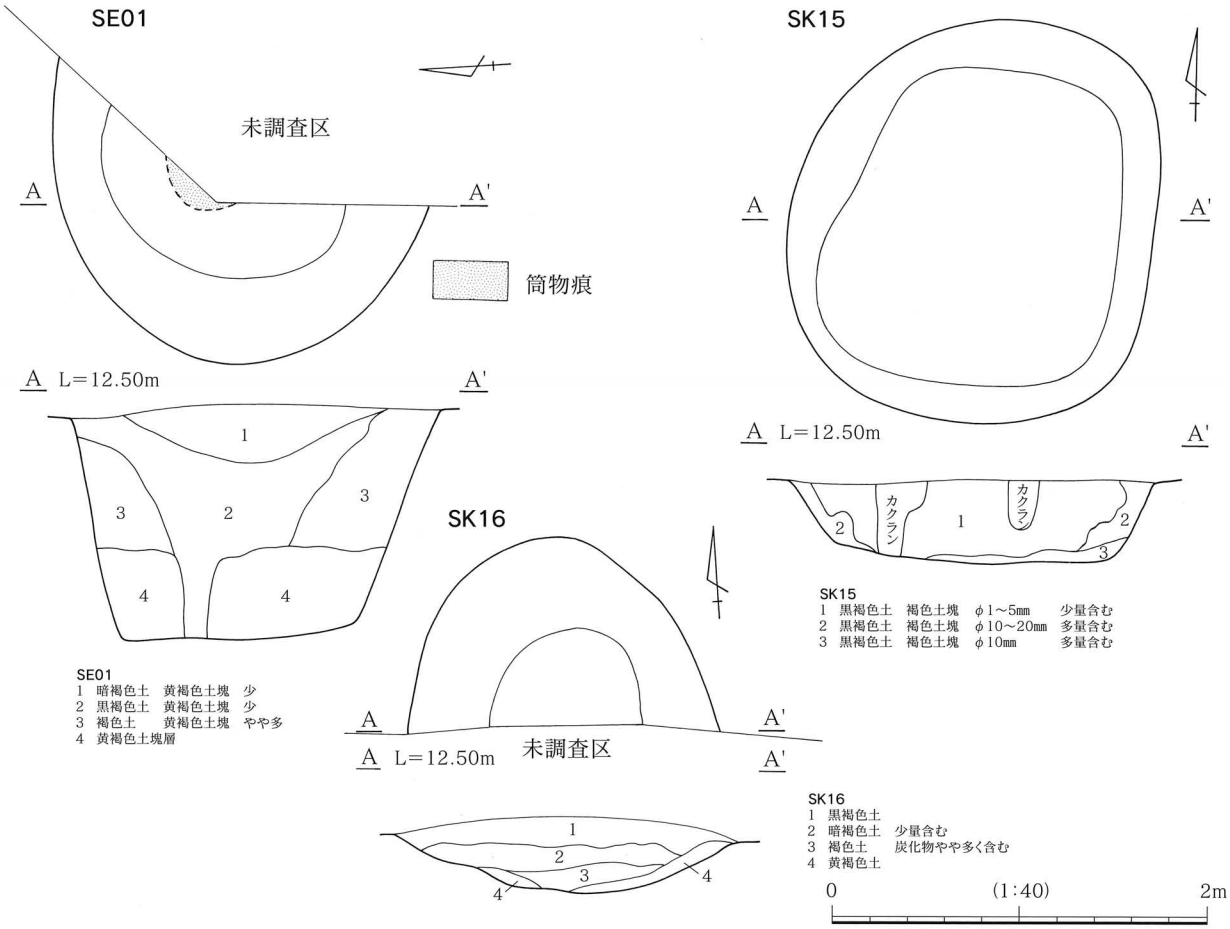
SK16（第14図　図版4－6）

C5区(B－1地区)に位置し、台地頂部の平坦面に立地する。平面形状は南部が調査区外となるため明確とは言い難いが、長軸長100cm以上×短軸長167cmの楕円形を呈していると推定され、断面形状は深さ36cmの皿状を呈する。覆土1層は他の中世遺構覆土に類似することより中世と推定される。

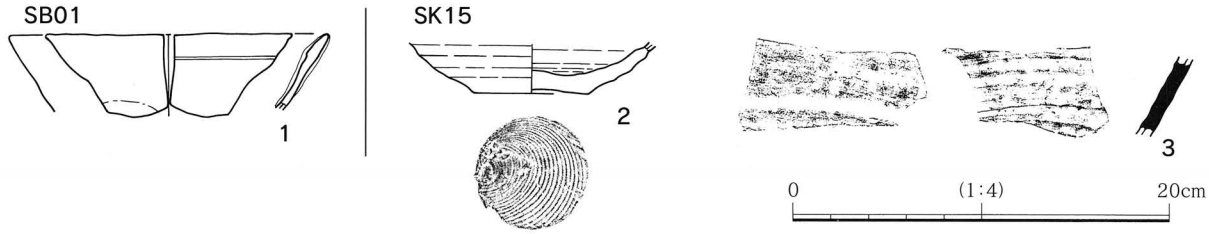
溝

SD88（第13図　図版4－2）

B13区（B－3地区）に位置し、台地頂部の平坦面に立地する。ほぼ南北方向に走向し、南北両端部が調査区外へと延びる。断面形状は幅50cm×深さ5～10cmの皿状を呈す。SB02に切られている。



第14図　B地区中世井戸・土坑



第15図　B地区出土遺物

遺物

SB01（第15図　図版7）

1は白磁碗である。直線的に開く口縁部、内面沈線を有し、外面体部下半が露胎となる。

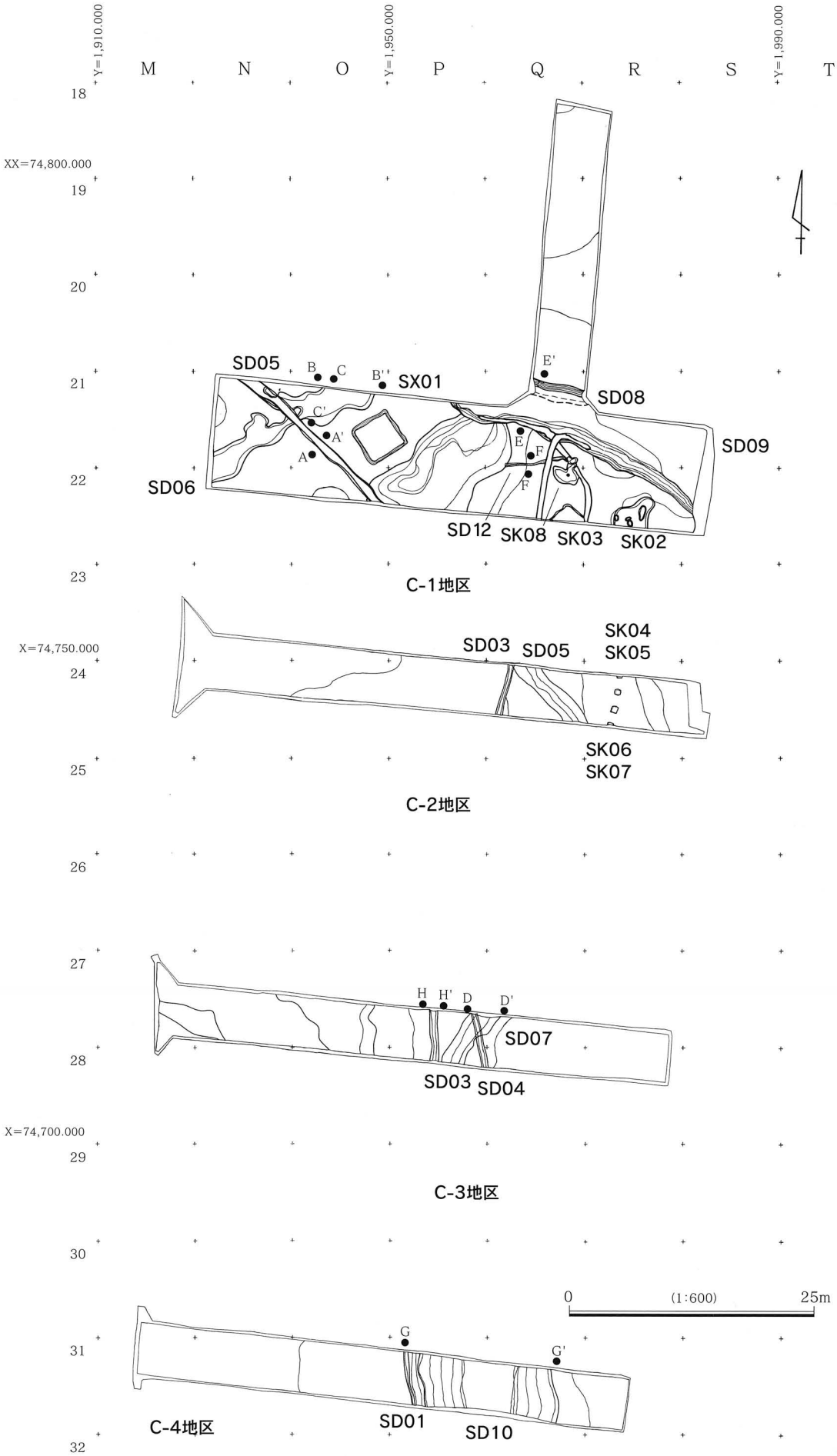
SK15（第15図　図版7）

2は中世土師器皿で、底部切り離しは右回転糸切りである。13世紀代と思われる。3は珠洲片口鉢で、卸し目は無いが内面は平滑に磨耗している。13世紀代と思われる。

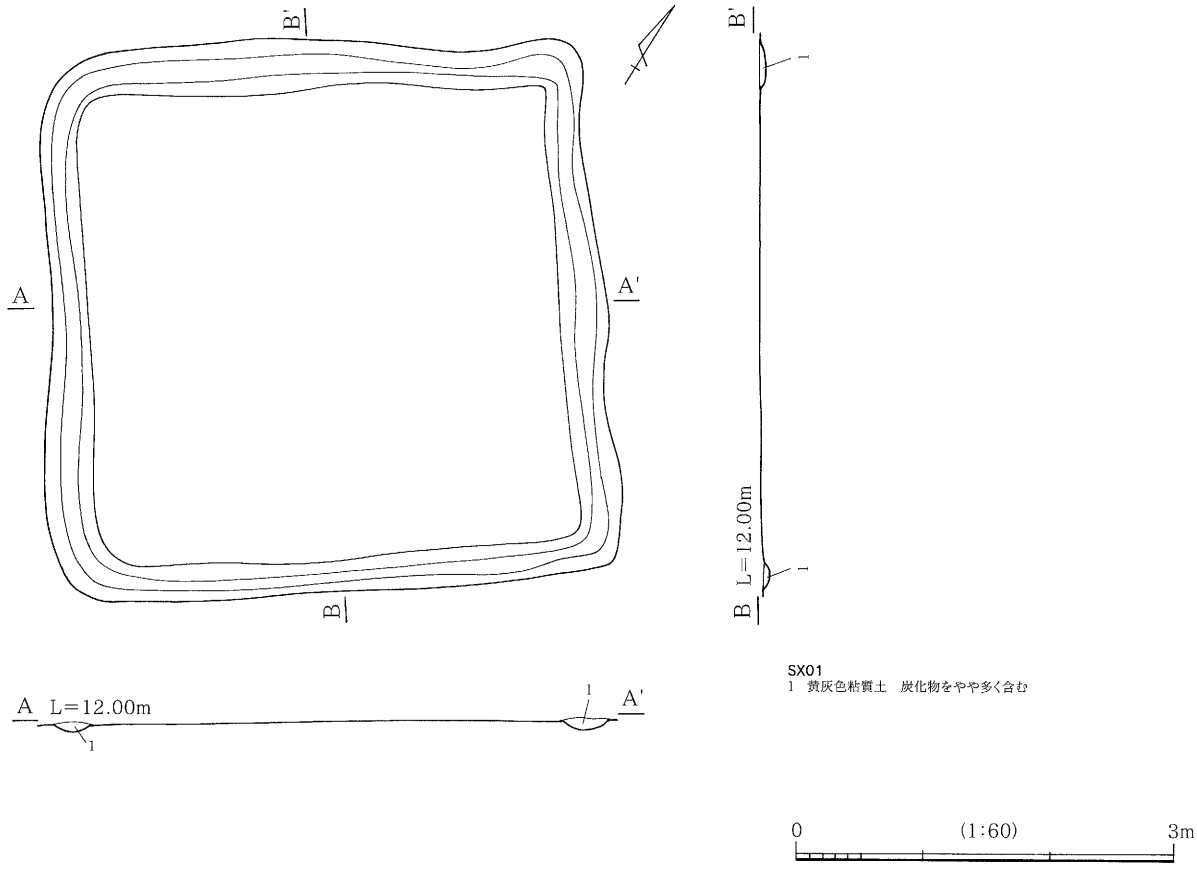
Ⅵ　C地区

1　概要

C地区は、遺跡の東南部に位置し、C－1～4地区の4地区に分かれており、古墳時代・古代・中世以降の遺構・遺物が検出されている。古墳時代では主にC－1地区を中心として分布し、古代はC－1・C－4地区に微量の遺構・遺物が認められ、C地区全域に中世以降の遺構が散在する。


Y=1,910.000
Y=1,950.000
Y=1,990.000
M
N
O
P
Q
R
S
T
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
XX=74,800.000
X=74,750.000
X=74,700.000
SD05
B
C
B''
SX01
C'
A'
A
E'
SD08
E
F
F'
SD09
SD06
SD12
SK08
SK03
SK02
C-1地区
SD03
SD05
SK04
SK05
SK06
SK07
C-2地区
H
H'
D
D'
SD07
SD03
SD04
C-3地区
0
(1:600)
25m
G
G'
C-4地区
SD01
SD10

第16図　C地区全体図



第17図　C地区SX01

2　遺構と遺物

A　古墳時代

遺構は、C－1地区を中心として性格不明遺構1基・土坑3基・溝および自然流路5条が検出され、遺物は須恵器・土師器・石製紡錘車・刀子が出土している。

性格不明遺構

SX01（第17図　図版5－5）

C地区北部のO～P21（C－1地区）に位置する。幅24～45cm×深さ3～20cmの「U」字状の溝が4.37m×4.43mの方形に巡る遺構である。内部にはその他の施設等は皆無で、硬化面も無い。溝の覆土は単層である。遺物の出土は皆無である。本遺構の性格は不明だが、溝に壁を埋め込んだ大壁建物の可能性も考えられる。

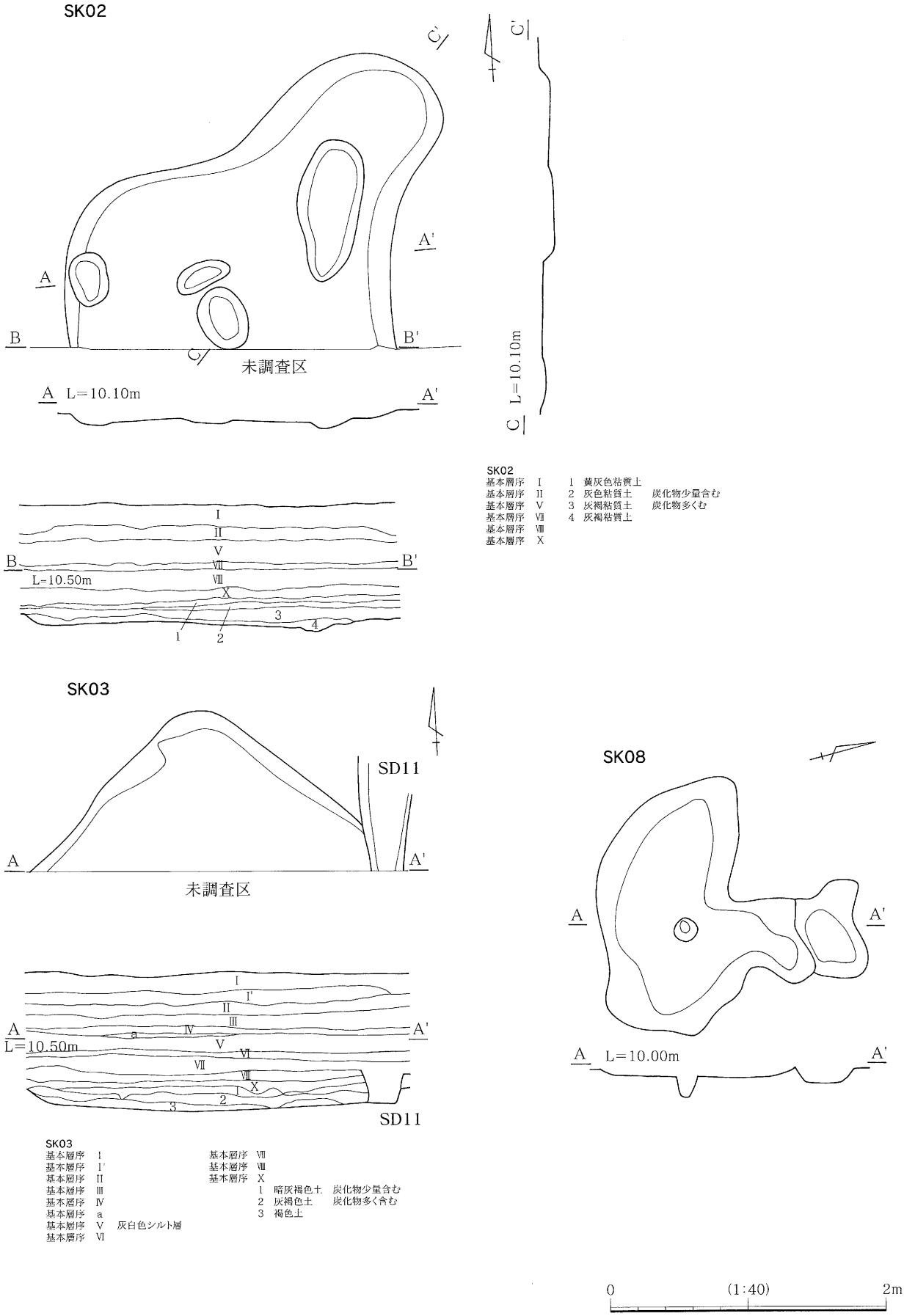
土坑

SK02（第18図　図版5－6）

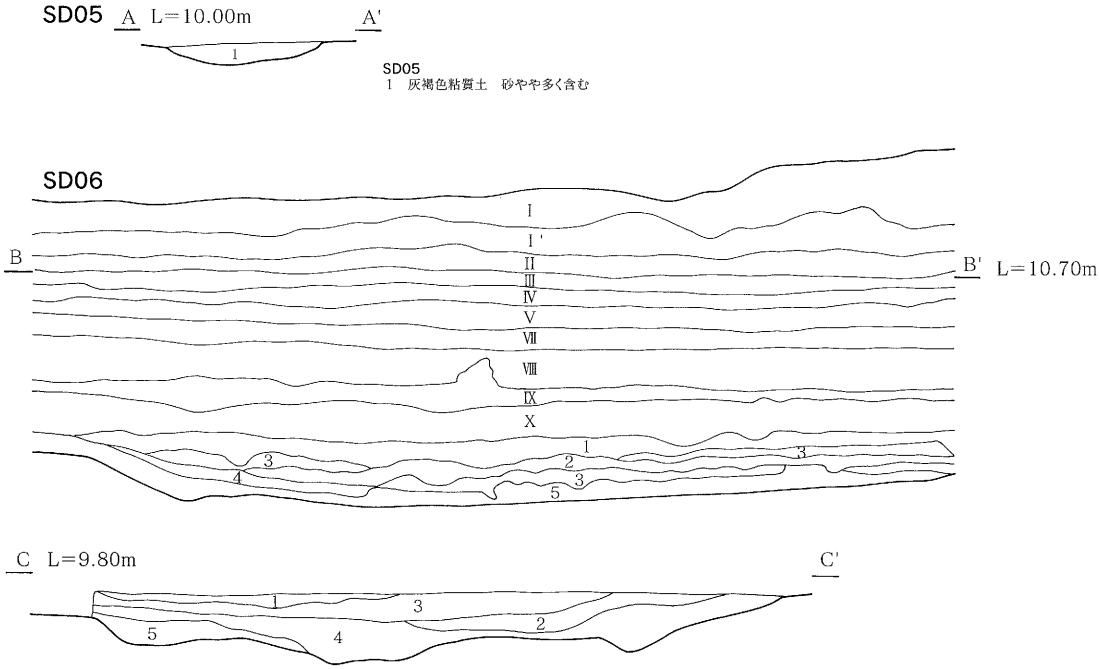
R22区（C－1地区）に位置し、自然流路SD09に近接する。遺構は南半部が調査区外となるため不明な点が多いが、長軸長352cm以上×短軸長320cmの不整形を呈し、深さ15cmである。壁は急な角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、4箇所に浅い落ち込みが認められる。遺物は土師器が少量出土している。

SK03（第18図　図版5－7）

Q～R22区（C－1地区）に位置し、自然流路SD09に近接する。遺構は南半部が調査区外となる



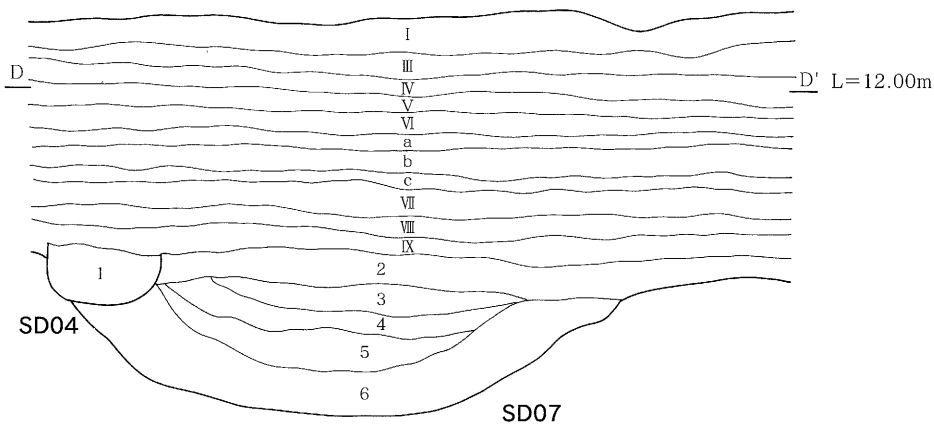
第18図　C地区古墳時代土坑



SD05
1 灰褐色粘質土 砂やや多く含む

SD06
基本層序 I
基本層序 I'
基本層序 II
基本層序 III
基本層序 IV
基本層序 V
基本層序 VI
基本層序 VII
基本層序 VIII
基本層序 IX
基本層序 X

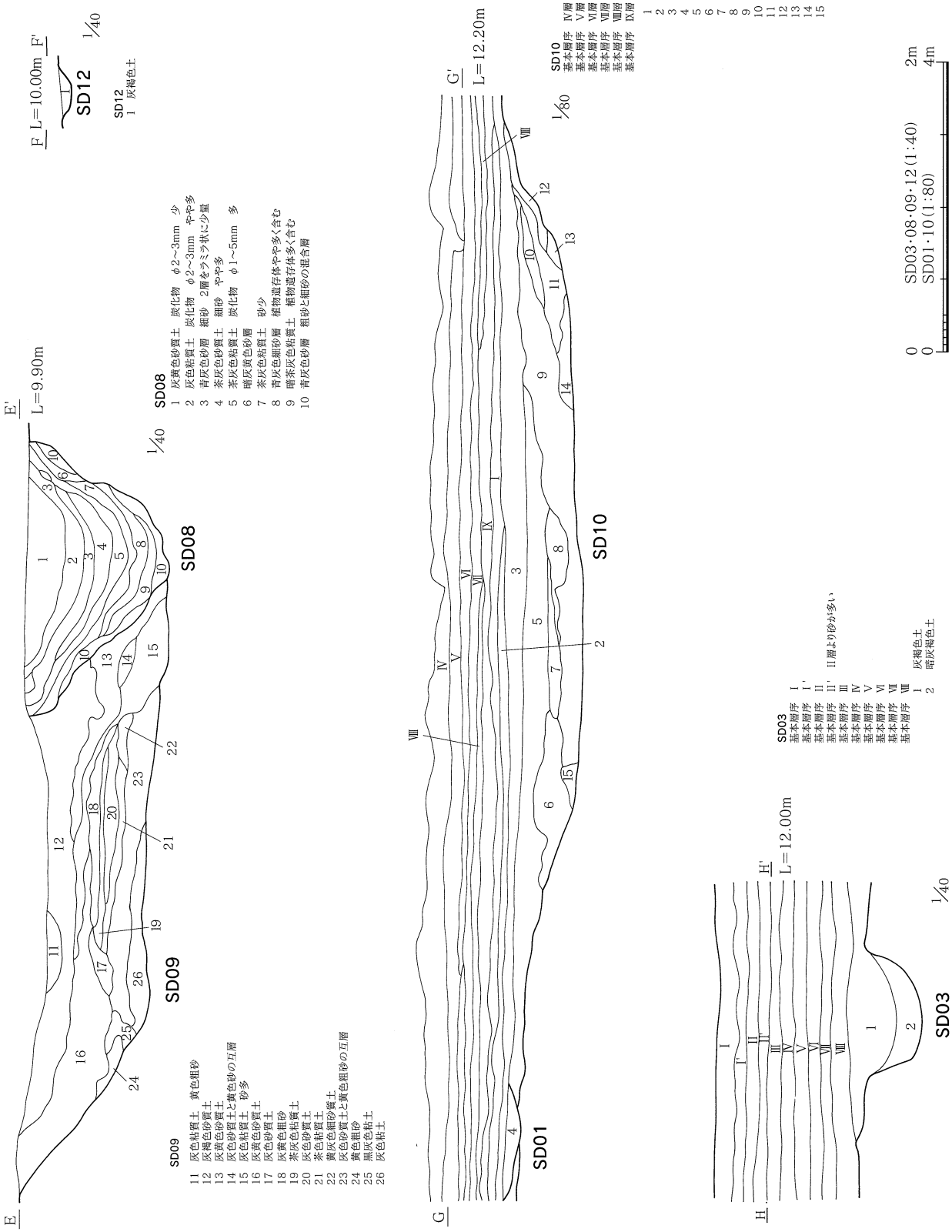
SD06
1 暗灰黄シルト 炭化物 φ1～10mm 少
2 極暗灰黄砂質 炭化物 φ1～5mm 多
3 明黄灰砂 炭化物 φ1～2mm 少 ラミラ状の洪水層で4層シルトと互層になる。
4 暗灰黄シルト 炭化物 φ1～5mm 少
5 黄灰砂 炭化物 なし



SD04·07
基本層序 I
基本層序 III
基本層序 IV
基本層序 V
基本層序 VI
a 灰褐色土
b 黄灰色砂質土
c 灰褐色土
基本層序 VII
基本層序 VIII
基本層序 IX
1 黄灰色砂質土 SD04
2 灰褐色粘質土 SD07
3 灰色砂質土 SD07
4 灰褐色砂質土 SD07
5 褐灰色砂質土 SD07
6 灰色砂質土 SD07

0 (1:40) 2m

第19図 C地区溝(1)


F L=10.00m F'
SD12
1/40
SD12
1 灰褐色土
E' L=9.90m
1/40
SD08
1 灰黄色砂質土 炭化物 φ2～3mm 少
2 灰色粘質土 炭化物 φ2～3mm やや多
3 青灰色砂層 細砂 2層をラミラ状に少量
4 茶灰色砂質土 細砂 やや多
5 茶灰色粘質土 炭化物 φ1～5mm 多
6 暗灰黄色砂層
7 茶灰色粘質土 砂少
8 青灰色細砂層 植物遺存体やや多く含む
9 暗茶灰色粘質土 植物遺存体多く含む
10 青灰色砂層 粗砂と細砂の混合層
SD08
SD09
SD09
11 灰色粘質土 黄色粗砂
12 灰褐色砂質土
13 灰黄色砂質土
14 灰色砂質土と黄色砂の互層
15 灰色粘質土 砂多
16 灰黄色砂質土
17 灰色砂質土
18 灰黄色粗砂
19 茶灰色粘質土
20 灰色砂質土
21 茶色粘質土
22 黄灰色細砂質土
23 灰色砂質土と黄色粗砂の互層
24 黄色粗砂
25 黒灰色粘土
26 灰色粘土
E
G' L=12.20m
1/80
SD10
基本層序 Ⅳ層
基本層序 Ⅴ層
基本層序 Ⅵ層
基本層序 Ⅶ層
基本層序 Ⅷ層
基本層序 Ⅸ層
1 灰褐色砂質土
2 灰褐色土
3 灰色砂質土
4 褐色シルト
5 灰褐色土
6 灰色砂質土
7 灰色砂質土
8 黒褐色土
9 灰色砂層
10 灰色砂質土
11 灰色砂層
12 黒褐色粘質土
13 灰褐色土
14 黒灰色土
15 黒褐色土
SD10
SD01
G
H' L=12.00m
SD03
基本層序 Ⅰ
基本層序 Ⅰ'
基本層序 Ⅱ
基本層序 Ⅱ'
基本層序 Ⅲ
基本層序 Ⅳ
基本層序 Ⅴ
基本層序 Ⅵ
基本層序 Ⅶ
基本層序 Ⅷ
1 灰褐色土
2 暗灰褐色土
Ⅱ層より砂が多い
1/40
SD03
H
0 SD03・08・09・12(1:40) 2m
0 SD01・10(1:80) 4m

第20図　C地区溝(2)

SK08（第18図　図版5－8）

Ｑ21～22区（Ｃ－１地区）に位置し、自然流路SD09に近接する。遺構は長軸長312㎝×短軸長288㎝の不整形を呈し、深さは5～15㎝である。壁は緩やかな角度で立ち上がり、底面凹凸が著しい。遺物は土師器が少量出土している。

溝

SD05（第19図　図版6－2）

未調査区を挟んだＮ～Ｏ21・Ｏ22区（Ｃ－1地区）およびＱ24区（Ｃ－2地区）の2箇所より検出された溝が走向方向及び規模・形状から同一溝と判断され、SD05として取り扱う。走向方向は北西～東南で、北西端と東南端は調査区外となるため不明であるが、推定される部分を含めた長さは50ｍ以上となり、直線的となる。断面形状は幅65～125㎝×深さ5～8㎝の皿状を呈する。底面はほぼ水平である。覆土には砂層が認められ、人為的に掘削された流路であったと推定される。重複関係は本溝がSD06を切り、SD03(中世)に切られる。遺物は覆土中より少量の土師器が出土している。

SD06（第19図）

Ｎ21～22、Ｏ21区（Ｃ－1地区）に位置し、西南西～東北東方向に蛇行しながら走向し、西端と東端は調査区外へと延びる。断面形状は幅180～400㎝×深さ10～18㎝の皿状を呈する。底面の標高は北に向かい低くなる。覆土には洪水が要因と思われる白色のシルト層が薄く認められ、氾濫に伴う自然流路と推定される。重複関係は本溝がSD05に切られる。遺物は覆土中より少量の土師器が出土している。

SD07（第19図　図版6－3）

Ｐ27～28区、Ｑ27区（Ｃ－3地区）に位置し、南南西～北北東方向に直線的に走向し、北端と南端は調査区外へと延びる。断面形状は幅193～270㎝×深さ40～78㎝の「Ｕ」字状を呈する。底面は南から北へ向かって深くなる。覆土には砂層が認められ、自然流路であったと推定される。重複関係は本溝がSD04（中世）に切られる。遺物は覆土上層より少量の土師器細片が出土している。

SD09（第20図　図版6－1）

Ｐ～Ｓ21・Ｒ22区（Ｃ－1地区）に位置し、西北西～東南東へとやや蛇行しながら走向し、西端と東端は調査区外へと延びる。断面形状は幅500～800㎝以上×深さ95～120㎝の「Ｕ」字状を呈する。自然河川と考えられ、重複関係は本溝がSD08（古代と推測される。）に切られており、底面には本遺構よりもさらに古い自然河川に伴う礫層が露出している。遺物は覆土中より少量の土師器細片が出土している。

SD12（第20図）

Ｑ21区（Ｃ－1地区）に位置し、西～東へとほぼ直線的に走向する。断面形状は幅18～40㎝×深さ5～15㎝の「Ｕ」字状を呈する。SK08と重複するが、新旧関係は不明である。覆土中より微量の土師器細片が出土している。

遺物

SK08（第21図）

1～3は須恵器大甕片で、外面に格子目状の叩き、内面に同心円当て目を施す。4は須恵器𤮋で、肩部に波状文と沈線が施文される。

SD05（第21図　図版7）

5は土師器高杯の杯身片である。口縁部～体部は外傾し、口唇部は薄くなり尖る。口縁部は横ナデを施す。6は土師器短頸壺である。胴部は球胴形を呈し、口縁部は内面に稜を有し、内湾気味に立ち

上がる。口縁部は横ナデ、内面はナデを施し、外面の整形は器面が荒れているため不明である。7は土師器短頸壺である。胴部は扁平な球胴形を呈し、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部横ナデ、胴部は内面ナデ、外面削りを施す。

遺構外出土遺物（第21・22図　図版7・8）

土器

8～11は手捏ね土器である。8は径に比して器高が高く、内面に指ナデ痕が残る。9は体部が大きく開きながら立ち上がる。10は体部が直立気味に立ち上がる。11は体部が外傾し、口縁部で直立気味となる。内面には指ナデ痕、外面には粘土紐接合痕が残る。

12～19は土師器椀である。12は口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、扁平な半球形を呈し、口縁部は横ナデ、胴部は内面にナデを施す。13は口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、扁平な半球形を呈し、口縁部は横ナデ、胴部は内面がナデ、外面に削りを施す。14は口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、半球形を呈し、口縁部は横ナデ、胴部は内面がナデを施す。15は口縁部が内傾気味に立ち上がり、半球形を呈し、口縁部は横ナデ、胴部は内面がナデを施す。16は口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、扁平な半球形を呈し、口縁部は横ナデ、胴部は内面がナデを施す。17は平底状で、口縁部がやや外反気味となり、口縁部は横ナデ、胴部は内面がナデ、外面は刷毛目後ナデ、底部は削りを施す。内黒である。18は半球形を呈し、口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、口唇部で外反する。口縁部は横ナデ、胴部は内面がナデ、外面に削りを施す。19は半球形を呈し、口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、口唇部で外反する。口縁部は横ナデ、胴部は内面がナデを施す。

20は高杯の杯部片である。口縁部は内湾し、横ナデを施す。脚部は削りを施す。

21は高杯脚部片である。脚部は「八」の字状に開き、横ナデが施される。

22～24は須恵器有蓋杯である。22は蓋である。体部下端に明瞭な稜をもち、口唇部に段を有す。天井部外面に左回転篦削りを施す。23は杯身である。口縁部下に稜をもち、口唇部に明瞭な段を有す。24は杯身である。口縁部下に稜をもち、口唇部に明瞭な段を有す。底部外面に左回転篦削り、底部内面に定方向の指ナデを施す。

25は須恵器壺である。球胴形で、口唇部は肥厚し、口縁は外反する。ロクロ調整、カキ目後に胴下部に叩きを施す。

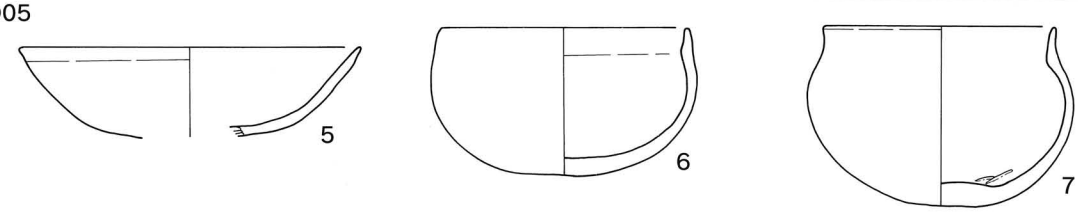
26は土師器小型甕である。口縁部に最大径を有す。口縁部横ナデ、胴部内面篦ナデを施す。

27は土師器小型壺である。口縁部は外反し、球胴形である。口縁部横ナデ、胴部外面削り、胴部内面ナデを施す。

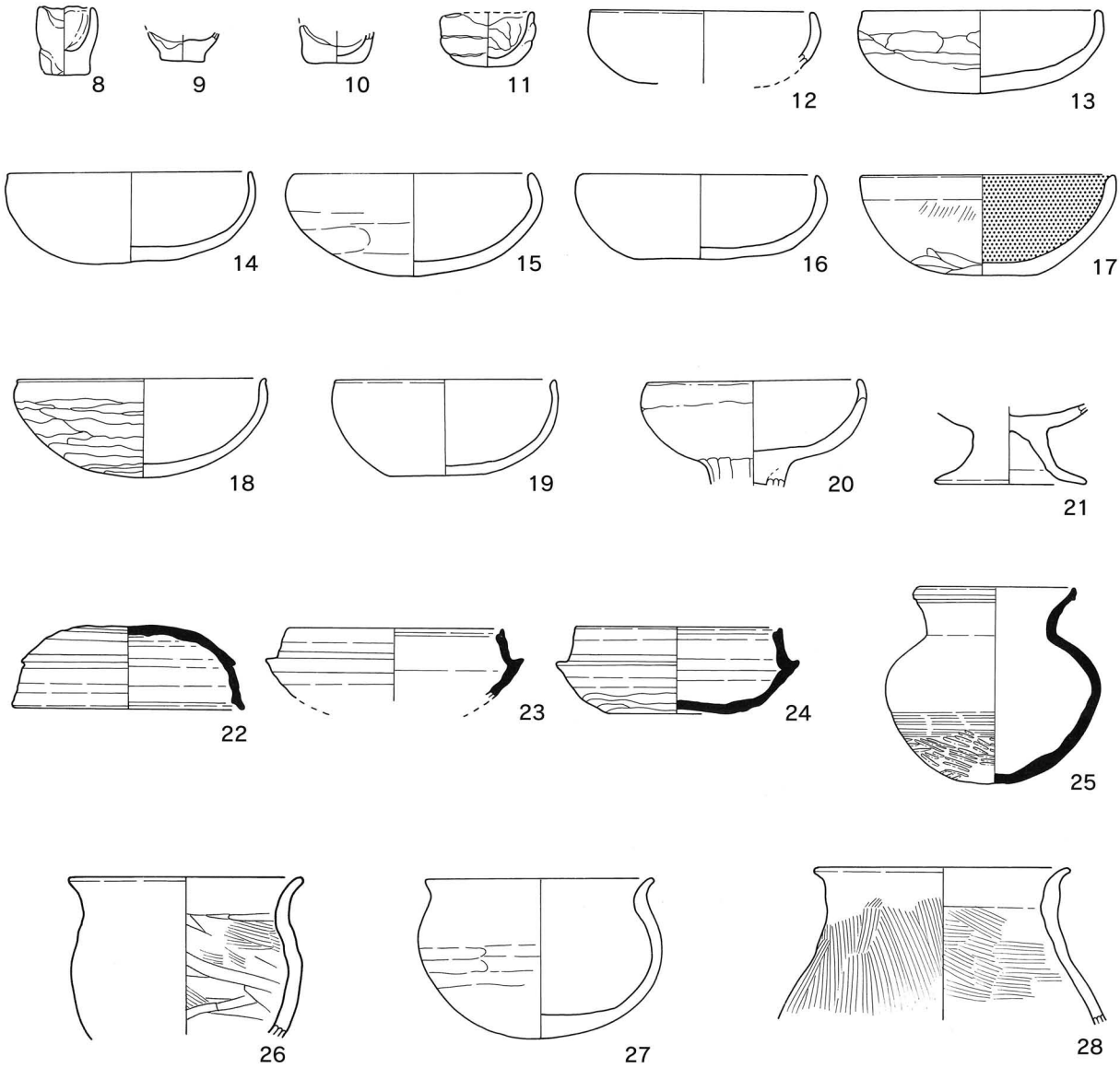
28～34は土師器甕である。28は胴上部撫で肩で、口縁部は外反する。口縁部横ナデ、胴部は外面縦位の刷毛目、内面横位の刷毛目を施す。29は底部が丸底、胴部は最大胴径を上位にもち、やや長胴化傾向がみられ、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部横ナデ、胴部は外面縦位の刷毛目、内面横位の刷毛目を施す。30は底部が平底、胴部は最大胴径を中位にもち、やや長胴化傾向がみられ、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部横ナデ、胴部は外面縦位の刷毛目、内面斜位の刷毛目を施す。31は胴部が最大胴径を中位にもち、やや長胴化傾向がみられ、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部横ナデ、胴部は外面縦位の刷毛目、内面斜位の刷毛目を施す。32は胴部が球胴形、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部横ナデ、胴部は外面斜位の刷毛目、内面横位の刷毛目を施す。33は底部が丸底、胴部は最大胴径を中位にもち、やや長胴化傾向がみられ、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部横ナデ、胴部は外面斜位の刷毛目、内面横位の刷毛目を施す。34は胴部は最大胴径を上位にもち、やや長胴化傾向がみられ、口縁部は緩やかに外反する。口縁部横ナデ、胴部が外面縦位の刷毛目、内面横位の刷毛目を施す。

SK08

SD05



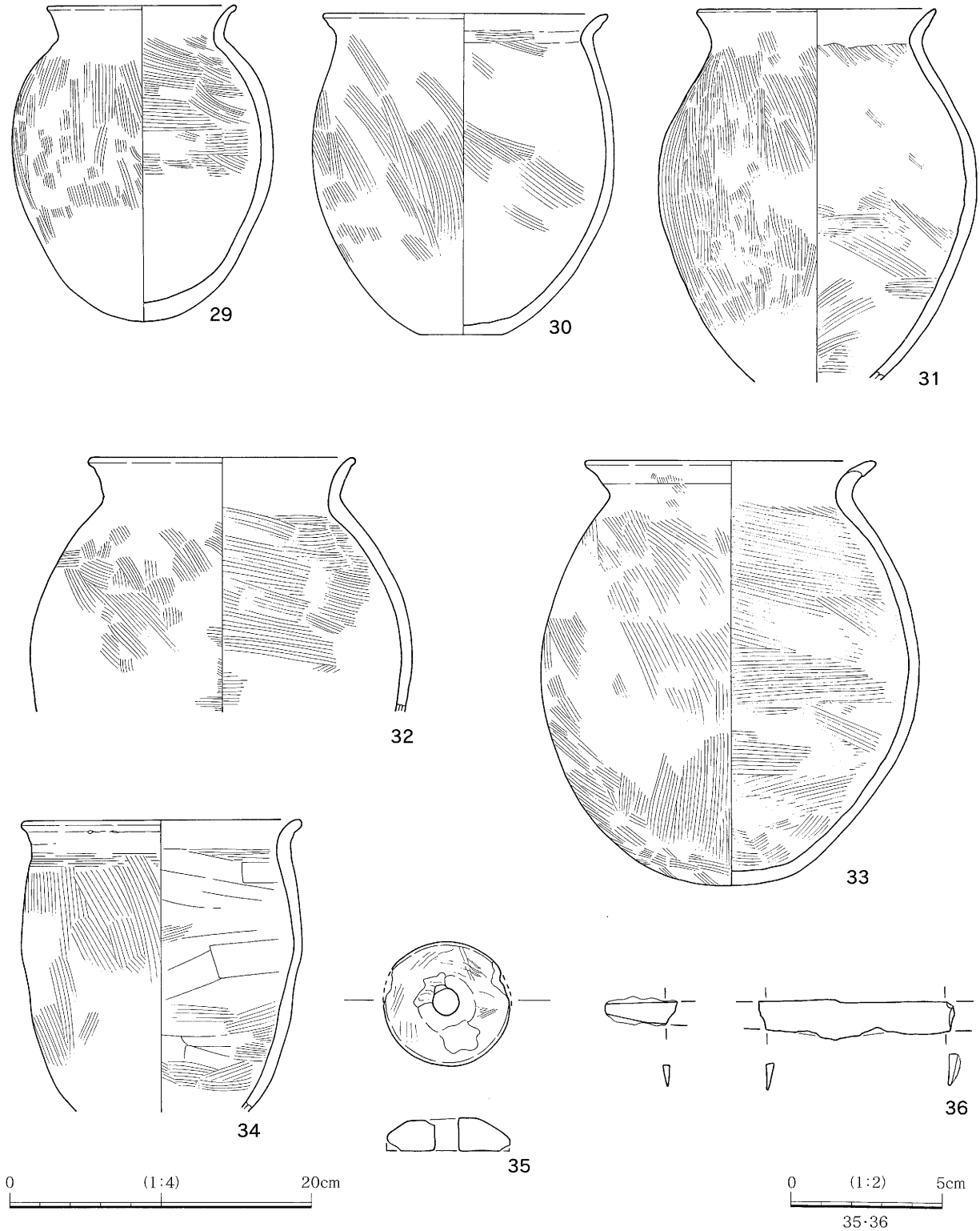
古墳時代遺構外



内黒

0 (1:4) 20cm

第21図　C地区古墳時代出土遺物(1)



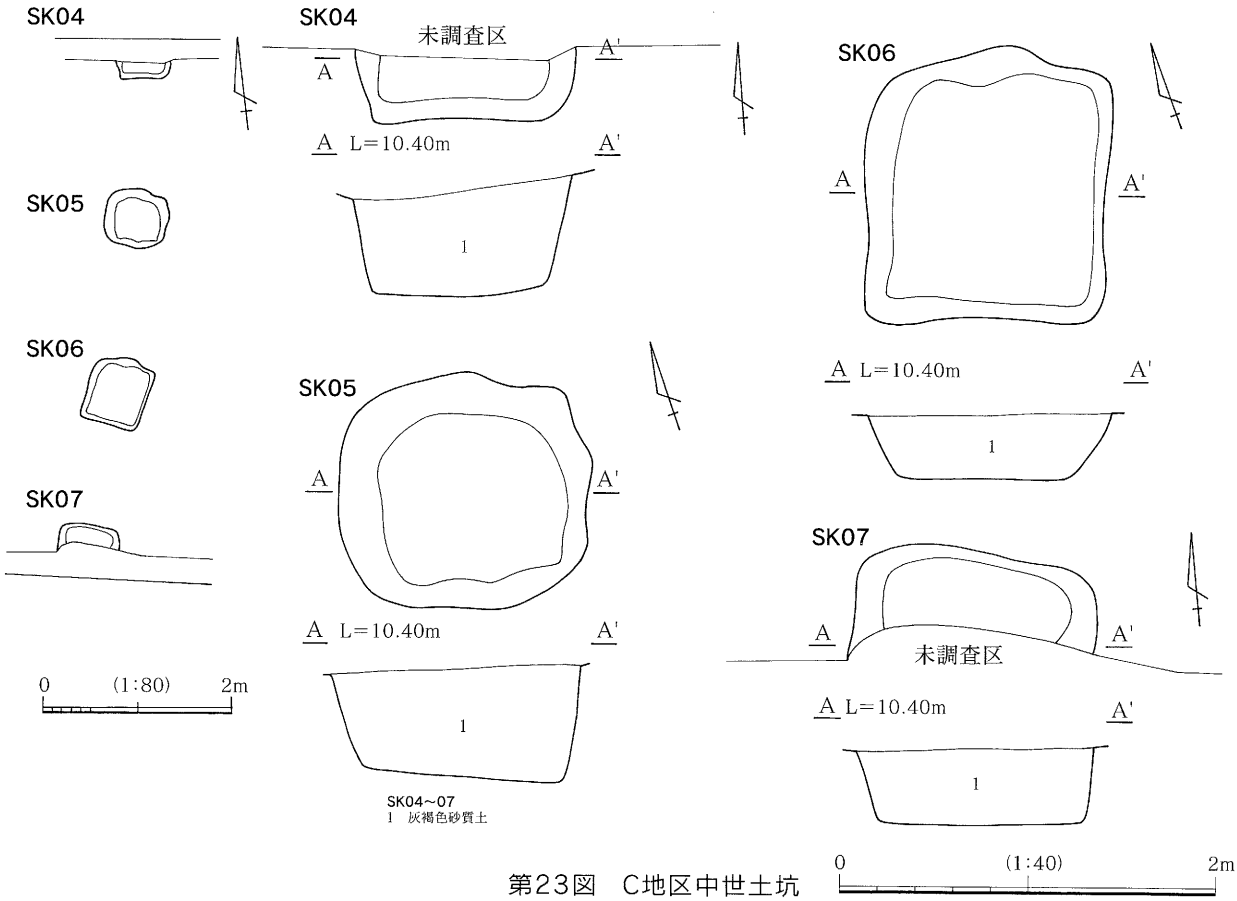
第22図　C地区古墳時代出土遺物（2）

石器・鉄製品

35は石製紡錘車である。滑石製で、器面には整形時の擦痕が見られる。36は鉄製刀子と思われる。刃部の中程が欠損消失し、長さ等は不明である。背関は角関、刃関は撫で関である。

B　古代

遺構は、C－1区に溝1条、C－3・4地区に自然流路1条が検出され、遺物は須恵器・土師器の細片が微量出土している。



第23図　C地区中世土坑

溝

SD08（第20図　図版6－5）

Q～R21区（C－1地区）に位置し、西北西～東南東へと直線的に走向、西端と東端は調査区外へと延びる。断面形状は幅150～210cm×深さ100cmの「U」字状を呈する。底面はほぼ水平である。SD09の覆土を切り構築されている。覆土中に砂層が認められ、形状等より人為的に構築された水路と考えられる。

SD10（第20図）

未調査区を挟んだP～Q31区（C－4地区）およびM～O27区（C－3地区）の2箇所より検出された溝が走向方向及び規模・形状から同一溝と判断され、SD10として取り扱う。走向方向は南～北西へと大きく蛇行し、北西端と南端は調査区外となるため不明であるが、推定される部分を含めた長さは65m以上となる。断面形状は幅15m×深さ82cmの皿状を呈する。自然河川である。遺物は覆土上層より微量の須恵器・土師器の細片が出土している。溝覆土中より出土した流木片の放射性年代測定の結果は4世紀後半を示しているが、流木であるため上限の可能性を示すにすぎず、古代と思われる遺物の出土より下限は古代となる。

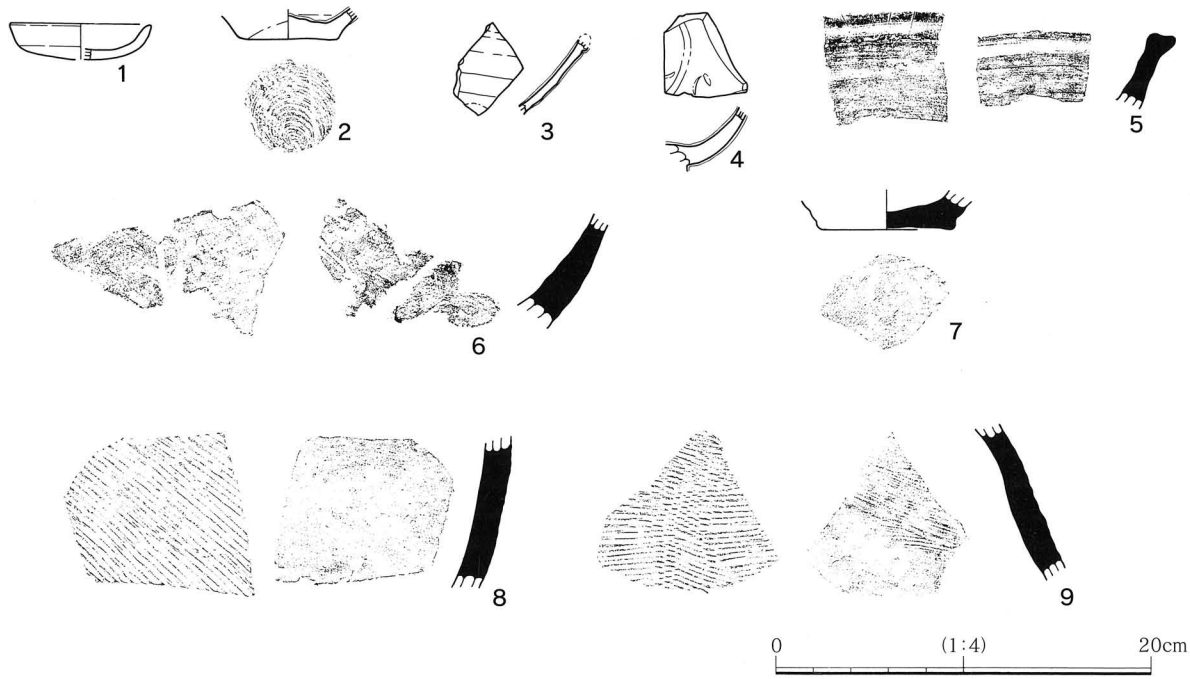
C　中世

遺構は、溝3条・土坑4基、遺物は中国輸入陶磁器・中世土師器が微量出土している。

土坑

SK04～07(第23図　図版6－7)

SK04～07はR24区(C－2地区)に位置する。これらの土坑は同一の形状と覆土を有し、南北方向に1列にほぼ等間隔で並ぶことから相互に関連した一連の遺構と判断し、一括して報告する。各土坑は一辺が125～145cmの矩形～方形を呈し、深さが18～30cmの鍋底状の断面となる。各土坑の間隔は220cm前後となる。各土坑の覆土は単層で、同質である。性格等は不明である。



第24図　C地区中世出土遺物

溝

SD01（第20図）

P31区（C－4地区）に位置する。僅かに弧を描きながらほぼ南北方向に走向し、北端と南端は調査区外へと延びる。断面形状は幅130～166cm×深さ27cm前後の皿状を呈する。重複関係はSD10の覆土を切る。

SD03（第20図　図版6－8）

未調査区を挟んだR21・Q21～22区（C－1地区）およびQ24区（C－2地区）、P27～28（C－3地区）の3箇所より検出された溝が走向方向及び規模・形状から同一溝と判断され、SD03として取り扱う。走向方向は南～北へと大きく弧を描き、北端で「L」字形に曲がり、南端は調査区外となるため不明であるが、推定される部分を含めた長さは67m以上となる。断面形状は幅50～90cm×深さ30cm前後の箱状を呈する。

SD04（第19図）

Q～R22・Q21区（C－1地区）およびP27～28（C－3地区）の2箇所より検出された溝が走向方向及び規模形状などから同一溝と判断され、SD04として取り扱う。なお、両地区の中間に位置するC－2地区においては既に削平を受け消失している。緩やかな弧を描き南北方向に走向した後、北端部で西方へと急激に曲がっている。断面形状は幅50～90cm×深さ30cm前後の箱状を呈する。

遺物（第24図　図版8）

全て遺構外より出土している。

1は中世土師器皿で、淡赤橙色の色調で、手捻り整形である。2は越中瀬戸で、灰釉が掛かり、外面胴部下端～底部は露胎である。3は白磁碗Ⅱ類である。小さな玉縁口縁をもち、体部下半は露胎である。4は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、内面に片切り彫り文が見られる。5～9は珠洲である。5は珠洲Ⅳ期の片口である。口縁部は内端に面をなす。6は珠洲の片口で、太目の卸し目がみられる。7は珠洲R種壺で、底部切り離しは静止糸切りである。8は珠洲T種甕である。9は珠洲T種甕で、綾杉状の叩きが見られる。

Ⅶ　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

本報告では、鵜坂I遺跡の発掘調査により課題とされた、1)C地区から検出された溝状遺構の年代、2)生産域とされるA地区におけるイネ科植物の産状、といった2点について、自然科学分析手法を用いて検討をおこなった。

1　試料

試料は、木片1点、土壌4点の計5点である。木片は、古墳時代或は中ー近世と考えられる溝状遺構（SD10）内より出土した流木とされる木片1点である。土壌試料は、当調査区の包含層とされるⅥ層の上部（包含層直上)・下部（包含層）から採取された土壌試料2点と同地区で検出された土坑覆土（SK11遺構覆土）と、C地区の溝状遺構（SD10）の埋積物の下部（HI－2 No.2）より各1点づつ採取された土壌試料である。これらの試料のうち、木片を対象に放射性炭素年代測定を、土壌試料を対象に植物珪酸体分析をそれぞれ行う。

2　分析方法

(1)放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得て、加速器質量分析（AMS）法で実施する。放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5,568年を使用し、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差（σ・2σ）を用いている。

(2)植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料を過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から栽培植物や古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

3　結果

(1)放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。SD10から出土した流木とされる木片（コナ

表1．放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代(BP)	δ13C(‰)	測定年代(BP)	Code.No.
C-4区 SD10　木片	コナラ属コナラ亜属 コナラ節	1,570±30	-28.68±0.74	1,630±30	IAAA-50855

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2．暦年較正結果

試料名	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)			相対比	CodeNo.
C-4区 SD10　木片	1,573±33	σ	cal AD 434 - cal AD 494	cal BP 1,516 - 1,456	0.685	IAAA-50855
			cal AD 505 - cal AD 536	cal BP 1,445 - 1,414	0.315	
		2σ	cal AD 416 - cal AD 559	cal BP 1,534 - 1,391	1.000	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

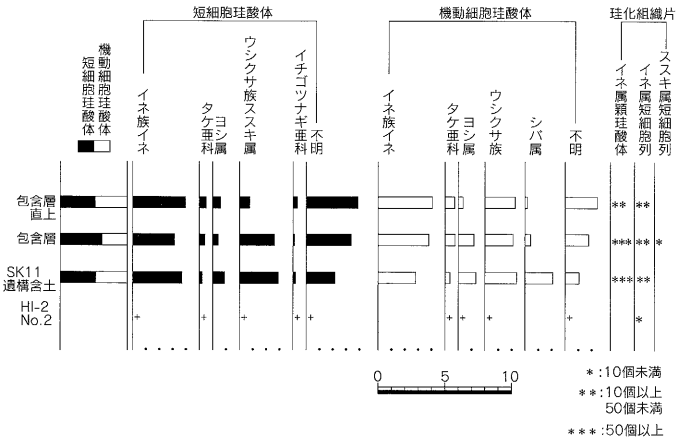


図1.植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、＋は100個未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の産状を＊で示す。

表3. 植物珪酸体分析結果

種類	地区 A-1 包含層直上	包含層	SK11遺構覆土	C-4 HI-2 No.2
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	47	61	55	1
タケ亜科	6	8	3	7
ヨシ属	7	8	13	-
ウシクサ族ススキ属	9	51	43	4
イチゴツナギ亜科	4	2	3	1
不明キビ型	27	36	23	12
不明ヒゲシバ型	4	13	1	-
不明ダンチク型	15	17	8	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	45	45	38	-
タケ亜科	8	9	5	17
ヨシ属	4	14	18	4
ウシクサ族	25	25	32	2
シバ属	2	5	28	-
不明	27	21	14	10
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	119	196	149	27
イネ科葉身機動細胞珪酸体	111	119	135	33
総計	230	315	284	60
珪化組織片				
イネ属穎珪酸体	24	136	114	-
イネ属短細胞列	12	20	41	1
ススキ属短細胞列	-	3	-	-

ラ属コナラ亜属コナラ節）の同位体効果による補正を行った年代値は1,570±30BPを示す。一方、暦年較正結果は、10年単位での表記が通例とされるが、将来的に予想される暦年較正プログラムの改訂・再検討に対応するため、本項では1年単位の表記としている。測定誤差はσ(統計的に真の値が68％の確率で存在する範囲）・2σ（95％の確率で存在する範囲）の値を示している、表2中の相対比は、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。木片の暦年較正結果は、測定誤差σではcalAD434-494、calAD505-536、2σではcalAD416-559を示す（表2)。

(2)植物珪酸体分析

結果を表3、図1に示す。各試料からは、植物珪酸体や珪化組織片が検出され、保存状態は概して良好である。

VI層に相当する包含層・包含層直上では、イネ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体の産出がともに目立つ。また、イネ属の葉部に形成される珪化組織片や籾殻に形成される穎珪酸体も認められ、包含層で穎珪酸体の産出が目立つ。

SK11遺構覆土では、イネ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体の産出が目立ち、穎珪酸体の検出個数も多い。上記した3試料では、イネ属以外のイネ科植物では、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属等が認められ、このうち、ススキ属を含むウシクサ族がイネ属に次いで多く産出する傾向が認められる。

一方、HI-2 No.2は、上記の3試料と異なり、イネ属は短細胞珪酸体が僅かに認められるのみであり、この他のイネ科植物もタケ亜科やヨシ属、ウシクサ族等が産出するが、検出個数は少ない。

4 考察

(1)鵜坂I遺跡におけるイネ科植物の産状

A地区のVI層では、イネ属の植物珪酸体や珪化組織片の産出状況から、これら土層の土壌の発達過程においてイネ属の葉部や籾殻が混入したことが推測される。現在の水田土壌中に含まれる植物珪酸体の調査では、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は9％とされ、稲藁を堆肥として与えている水田では16％に上がるという結果が得られている（近藤,1988)。本分析結果でのイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、VI層では約40％と極めて高い値を示すことから、土壌中にイネ属の葉部や籾殻が多量に

積していた状況が指摘される。

本遺跡周辺では、金屋南遺跡（富山市）の河道跡内の古代相当層や中名V・VI遺跡の古代・中世の遺物包含層からイネ属の植物珪酸体が認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2003・2005）。また、中名V・VI遺跡を含む中名遺跡群では、検出された種実遺体の検討から、古代にはイネ、オオムギ、アサ、ウリ類、ヒョウタン類や果樹のウメ・モモが利用されていた可能性が指摘されている（中村,2005）。このうち、イネ属・オオムギは特徴的な植物珪酸体を形成するが、この他では特徴的な植物珪酸体が見られないため、植物珪酸体の産状から栽培の有無を判断することは困難である。

以上の結果、本遺跡周辺では、当該期にはイネをはじめとして、多くの栽培種と考えられる植物が利用されていたことは明らかであり、本遺跡のA地区における遺構の検出状況やVI層やSK11におけるイネ属の植物珪酸体や珪化組織辺の産状からイネの栽培の可能性もある。ただし、当該期の栽培植物を考慮すると、イネ以外の栽培植物を栽培するために用いられた施肥・堆肥の痕跡である可能性も考慮する必要がある。

一方、上述したイネ属を除くイネ科植物の産状から、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属などのイネ科植物の生育が窺われる。この中では、ススキ属を含むウシクサ族の産出が目立っており、ススキ属には比較的乾いた場所に生育する分類群が多いことや、今回の調査地点が微高地・台地上に立地することを考慮すると、調査区内や遺跡周辺はススキ属等が生育するような乾いた環境であったことが推測される。また、湿潤な場所に生育するヨシ属も認められることから、周辺には湿潤な場所も存在したことが推測される。

引用文献

近藤　錬三,1988,十二遺跡土壌の植物珪酸体分析.鋳師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書－,御代田町教育委員会,377-383.

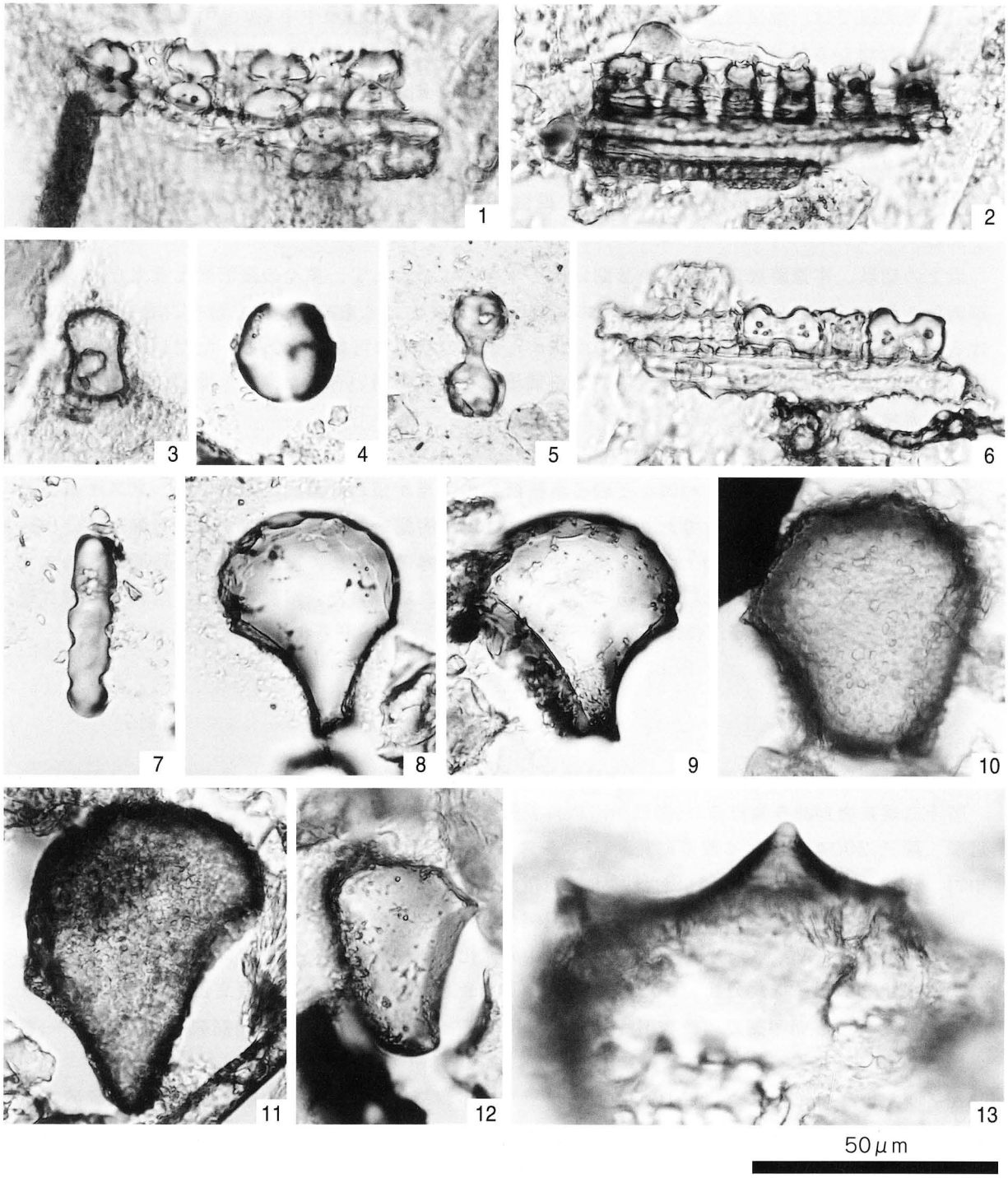
近藤　錬三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.

中村　亮仁,2005,中名遺跡群における古環境復元.「富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報書第26集　中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告―公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告IV　第一分冊―,財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所,61-77.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2003,金屋南遺跡の自然科学分析.「富山市埋蔵文化財調査報告書131集　金屋南遺跡発掘調査報告書II―金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)―,富山市教育委員会,68-81.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,中名V・VI遺跡の自然科学分析.「富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報書第26集　中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告―公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告IV　第三分冊―,財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所,121-150.

図2 植物珪酸体



1. イネ属短細胞列(古代遺物包含層)
2. イネ属短細胞列(SK11;遺構覆土)
3. タケ亜科短細胞珪酸体(HI-2;2)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(SK11;遺構覆土)
5. ススキ属短細胞珪酸体(古代遺物包含層)
6. ススキ属短細胞列(古代遺物包含層)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(古代遺物包含層)
8. イネ属機動細胞珪酸体(古代遺物包含層)
9. イネ属機動細胞珪酸体(SK11;遺構覆土)
10. タケ亜科機動細胞珪酸体(HI-2;2)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体(SK11;遺構覆土)
12. ウシクサ族機動細胞珪酸体(古代遺物包含層)
13. イネ属頴珪酸体(古代遺物包含層)

Ⅷ 総 括

今回の調査では、AからCの3地区に遺構・遺物が検出され、時代としては古墳時代から中世にわたっている。各調査区単位に調査成果をまとめると次のようになる。

A地区

本地区は、今回の発掘調査により古代の遺構・遺物と中世の遺物が発見されている。

古代では、畑跡・溝・土坑が検出されており、重複関係などから見ると畑跡が形成された時期と、溝や土坑が構築された時期の2時期が存在すると考えられる。

畑跡は、その長軸方向によりⅠ～Ⅴ群に分かれ、各群はその分布域に差が存在する。また、各群には一部に重複関係が認められ、群単位に形成された時期が僅かながらも時間差を伴うと考えられる。これらから畑跡は複数回の耕作により形成されたものと考えられる。畑跡の形成された時期は明確に伴出した遺物が皆無のため不明であるが、畑跡よりも新しく構築された溝の出土遺物が9世紀以降であることより古代の中でも9世紀以前であると考えられる。畑跡の中にあるSK11よりイネのプラントオパールが検出されていることにより、イネの栽培が行われていたと思われる。

溝と土坑は、畑跡との重複関係から見ると構築時期に若干の差が認められ、調査で検出された全ての溝が畑跡よりも新しく、重複の新旧関係の明らかな土坑も畑跡より新しいことが明らかとなっている。また、畑跡とは異なり、微量ながらも遺物の伴出があり、人の生活臭が窺える。微量の遺物の出土より生活の場であった可能性が見出され、本時期の遺構の主体が溝であることから生産などの別の場であった可能性も示唆される。これより溝・土坑が構築された時期においての本地区は生産の場などに近隣する小規模な集落、或いは集落の縁辺部であったと考えられる。本時期は伴出遺物より9世紀以降となる。

中世では微量の遺物が出土したに過ぎず、その性格などは不明である。

B地区

本地区は、古墳時代の遺構・遺物と古代の遺構・遺物及び中世の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代では、湧水点が検出され、ここより微量の土師器が出土しており、小規模な集落が存在した可能性は充分に窺える。今回の調査は道路部分のみで、古墳時代の集落は周辺の未調査区に存在すると考えられる。集落形成された時期は土師器が五社遺跡出土例に類似することより5世紀中葉と考えられる。

古代では、微量の遺物と溝1条が検出されているに過ぎない。遺物はいずれも細片で古代の土師器であること以上に詳細な時期を判定するのは不可能である。溝は規模・形状などがA地区で検出されている畑跡に類似することから畑跡サクの可能性も考えられる。本地区の南側に接して式内社鵜坂神社が存在し、資料が少ないながらも古代の遺跡が認められたことは当時の鵜坂神社が当地にあったことの可能性を高めたと思われる。

中世では、掘立柱建物跡３棟・井戸１基・土坑２基・溝１条が検出されており、当時集落が形成されていたことが明らかとなっている。遺構の分布はB－3地区に集中するが、SK16がB－１地区に存在することより希薄ながらもB地区全域に存在が予想される。

掘立柱建物跡は、限られた調査範囲のため、いずれもその全貌を明らかにすることができていないが、各建物の部分的な特徴から次のような推定が可能と思われる。SB01は、比較的多くの部分が検出されており、梁行き3間×桁行き2間以上の総柱建物で、当時の一般的な建物であったと考えられる。

SB02は、建物の北西隅が検出されていると考えられ、その南部が調査区外に、東部は近現代の耕地整理に伴う削平により消失していると考えられる。検出された部分の東西柱間の距離が1.5mと短いことから庇部分の可能性が考えられ、東西両面に庇が付く2面庇の建物であった可能性がある。SB03は、3本のピットが検出されただけで、建物であるかどうか不明で、別の性格を有する可能性がある。

井戸は、SB01に切られており、このことから本集落が2時期以上に細分されることが理解できる。また、井戸は覆土の層位を見ると下部中央に曲物などを埋めた埋設物の痕跡が検出されおり、複雑な構造を持っていたと思われる。

土坑は、2基検出されており、いずれも覆土は自然堆積で、墓坑の可能性は無く、その性格は不明である。

C地区

本地区は古墳時代の集落、古代の溝、中世の溝が検出されている。

古墳時代では、性格不明の方形周溝状遺構1基、土坑3基、溝6条が検出されている。

方形周溝状遺構は、幅の狭く、深さの浅い溝が方形に巡るだけの遺構で、証左は無いが簡易的な建物跡の可能性がある。なお、溝が方形状に巡る例として、中世であるが杉谷H遺跡方形周溝状遺構がある。土坑はいずれも性格不明で、溝は自然流路2条、氾濫によると思われる流路1条、人為的に掘削された溝2条が存在する。これらの遺構は伴出遺物から5世紀後半代が想定され、その性格は自然流路周辺に営まれた短期的に形成された小規模集落と考えられる。

古代では、溝2条が検出されているが、いずれも詳細な時期を決定するだけの資料は得られていない。SD08はその形状から人為的に構築された溝と考えられ、覆土中に砂層が認められることから灌漑用水と思われる。SD10は年代測定の結果4世紀末葉を上限とし、出土遺物より古代が下限となる自然流路である。

中世では、3条の溝が検出されており、いずれも人為的に構築されたもので、その構築時期は遺物の出土が皆無で、詳細な時期は不明である。

参考文献

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所　1998　『五社遺跡発掘調査報告』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所　2002　『清水島II遺跡・中名II遺跡・持田Ⅰ遺跡調査報告』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所　2002　『中名Ⅴ遺跡発掘調査報告書』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所　2003　『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所　2004　『道場Ⅰ・II遺跡発掘調査報告書』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所　2005　『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』

富山文化研究会　1975　『富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書』

婦中町史編纂委員会　1996　『婦中町史』　通史編

婦中町史編纂委員会　1997　『婦中町史』　資料編

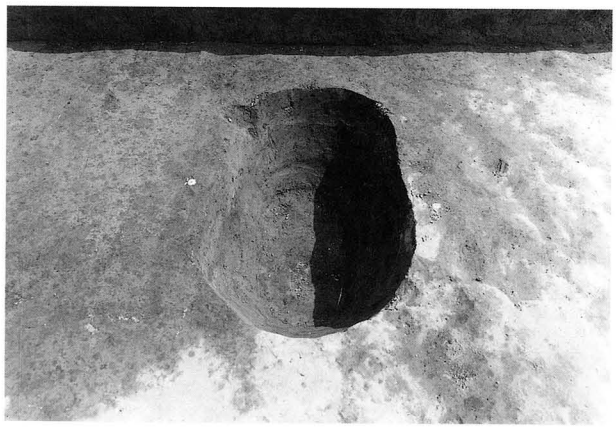
婦中町教育委員会　1995　『中名II遺跡　発掘調査報告』

A－1地区全景　東より

A－2地区北部全景　東より

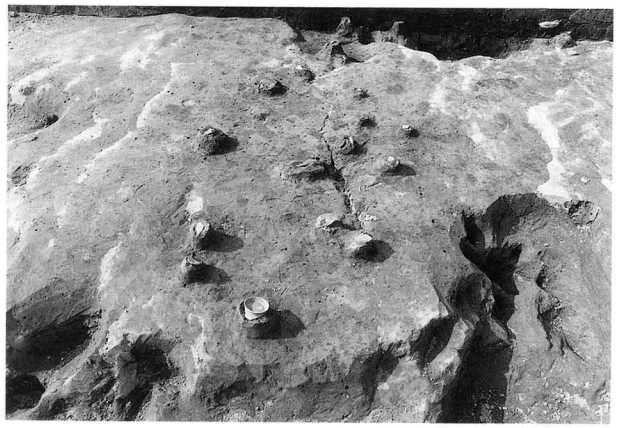
A－2地区南部全景　南より

A－3地区全景　東より



A－1地区 SK09　南より

A－2地区 SK10　南より



A－2地区 SK11　南より

A－1地区 SK12　東より

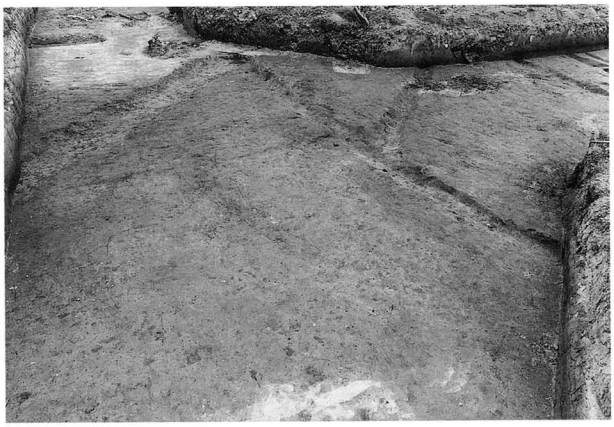
図版2

A－2地区 SK13　南より

A－1地区 SD52・56　南より

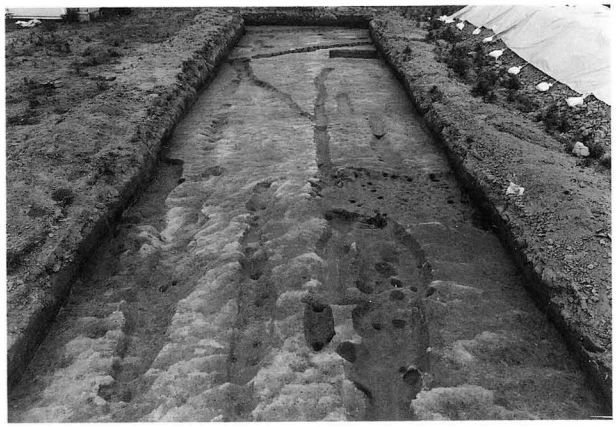
A－1地区畑跡　東より

A－1地区東端　南より



A－2地区 SD21～23　西より

A－2地区畑跡　西より

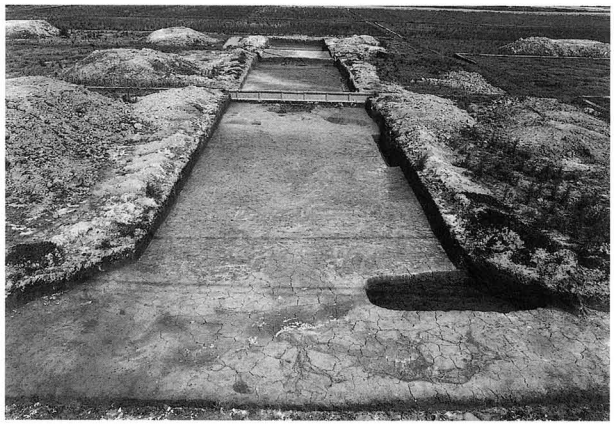


A－1地区 SD57・65　東より

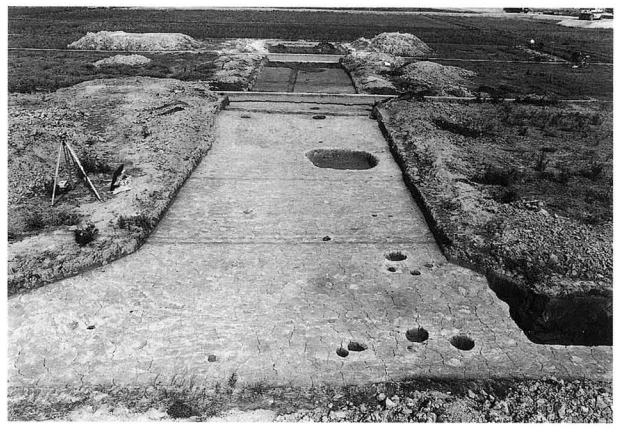
A－2地区南部畑跡　南より

B－１地区全景　西より

B－１地区全景　東より



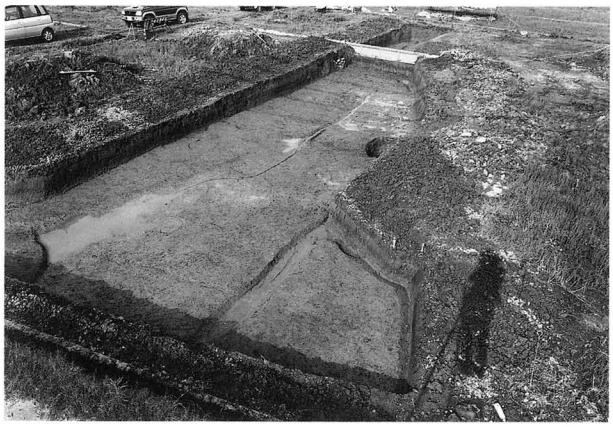
B－２地区全景　西より



B－３地区全景　西より

B－３地区全景　東より

B－３地区西部全景　南より



B－４地区全景　西より

B－1・２地区西部全景　南より

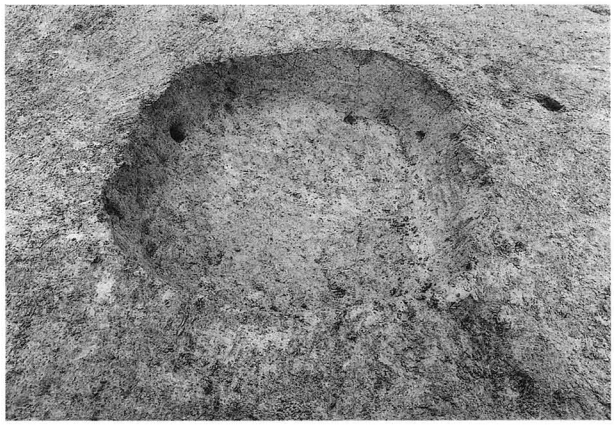
図版4

B－3地区 SB01　北より

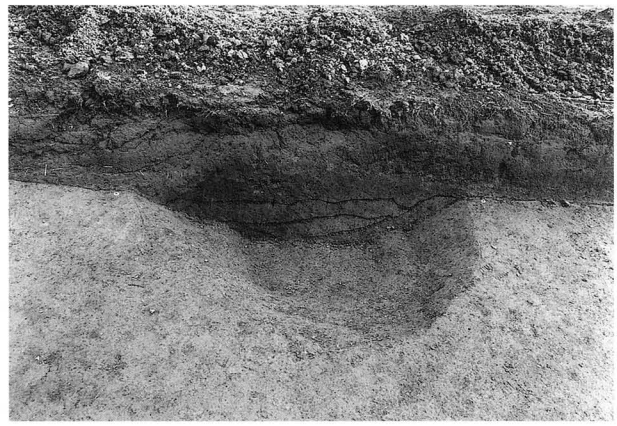
B－3地区 SB02・SD88　北より

B－2地区 SB03　南より

B－3地区 SE01　東より



B－3地区 SK15　南より



B－1地区 SK16　北より

B－3地区 SX03　東より

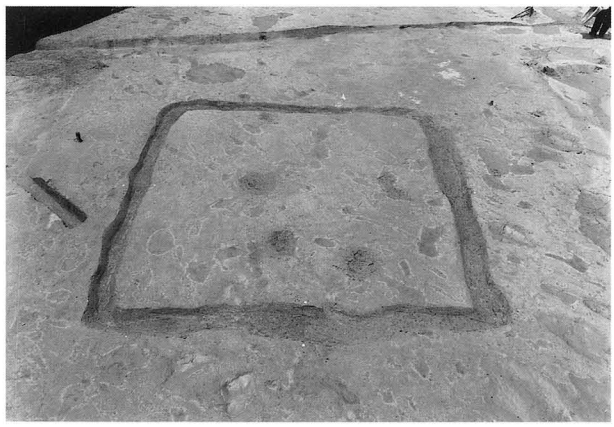
B－3地区 SX03 遺物出土状況　南より

C－１地区全景　西より

C－２地区全景　東より

C－３地区全景　東より

C－４地区全景　東より



C－１地区 SX01　北より

C－１地区 SK02　北より

C－１地区 SK03　北より

C－１地区 SK08　東より

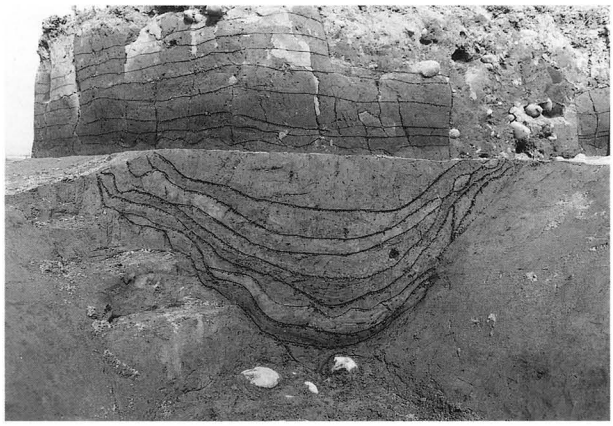
図版6

C－1地区 SD09　東より

C－1地区 SD05　東より

C－3地区 SD07　南より

C－2地区 SD05　南より

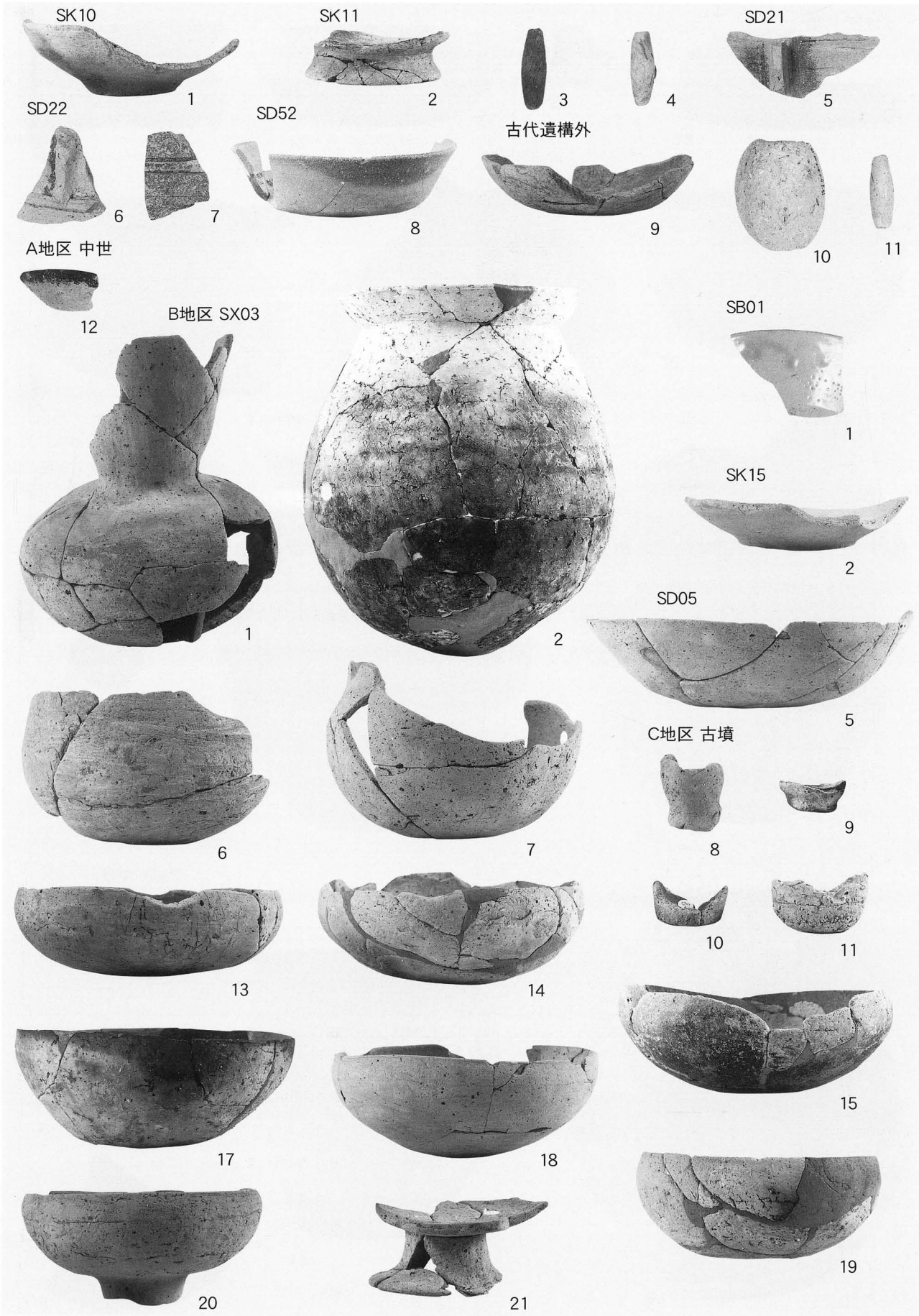


C－1地区 SD08　東より

C－1地区 SD08　東より

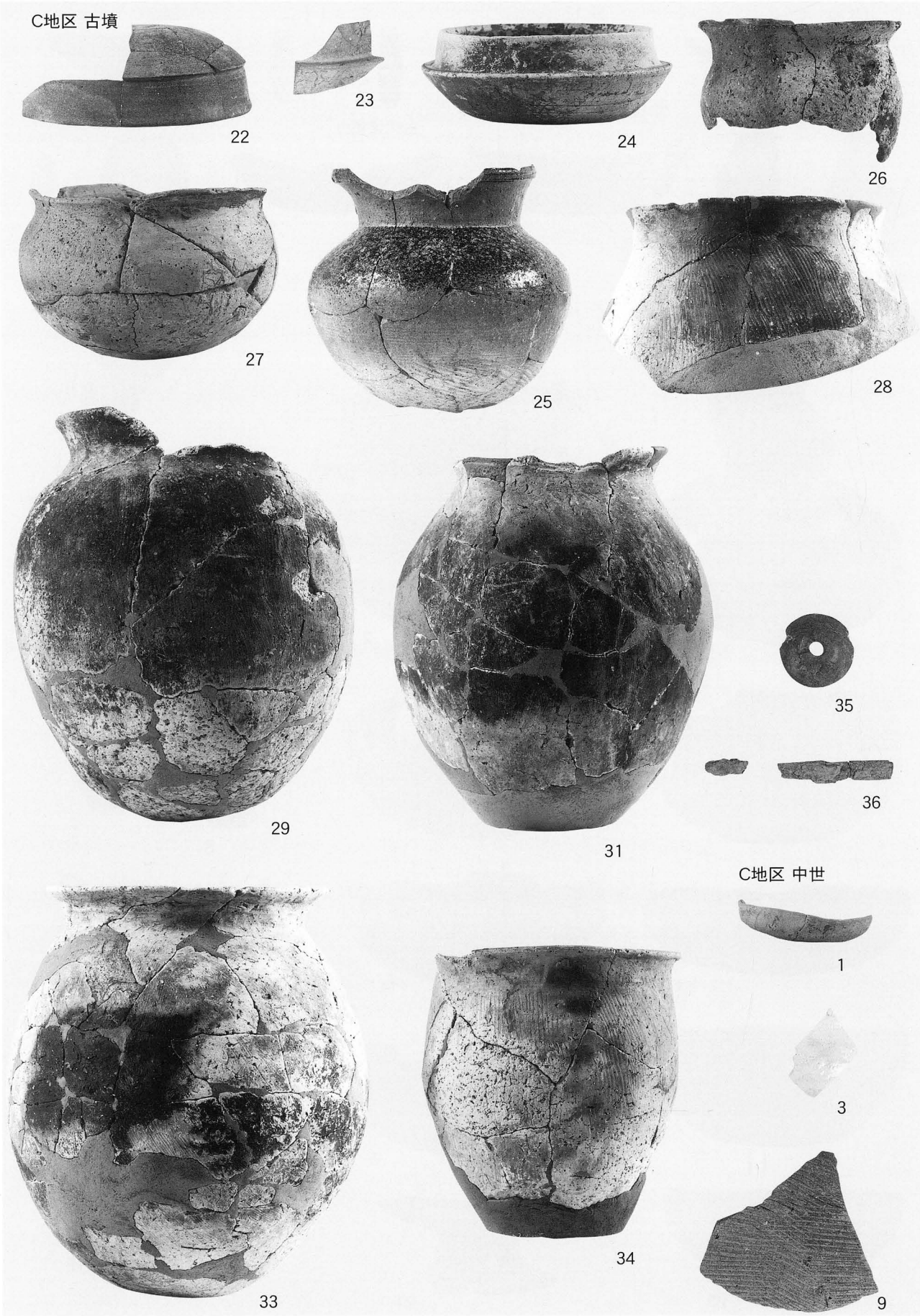
C－2地区 SK04～07　東より

C－1地区 SD03　南より


SK10
1
SK11
2
3
4
SD21
5
SD22
6
7
SD52
8
古代遺構外
9
10
11
A地区 中世
12
B地区 SX03
1
2
SB01
1
SK15
2
SD05
5
6
7
C地区 古墳
8
9
10
11
13
14
15
17
18
19
20
21

出土遺物（1）

図版8



出土遺物（2）

抄　　録

ふりがな	とやまし　うさかいちいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	富山市　鵜坂Ⅰ遺跡　発掘調査報告書
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	4
編著者名	折原洋一・大橋忠昭(山武考古学研究所)　堀内大介(富山市教育委員会)
編集機関	山武考古学研究所
所　在　地	〒286-0045　千葉県成田市並木町221番地　　TEL0476－24－0536
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
所　在　地	〒930-0803　富山市下新本町5-12　　TEL076－442－4246
発行年月日	西暦2005年9月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村名	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
鵜坂Ⅰ遺跡 (うさかいち)	富山市婦中町鵜坂51番地2外 (とやまし ふちゅうまち うさか)	162019	362132	36° 40′ 27″	137° 11′ 15″	20050522 ～ 20050723	4,480m²	住宅団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鵜坂Ⅰ遺跡	集落跡	古墳時代	性格不明遺構 湧水点状遺構 土坑 溝	須恵器、土師器、 刀子、石製紡錘車	古墳時代の集落はB・C地区に存在したと推測される。
		古代	土坑 溝 畑跡	須恵器、土師器、土錘	古代の畑はA地区に存在する。
		中世	掘立柱建物跡 井戸 土坑 溝	白磁、青磁、古瀬戸、 珠洲、中世土師器	中世集落はB地区に存在する。

要　　約

鵜坂Ⅰ遺跡は、A～Cの3地区に遺構・遺物の集中が存在する。A地区は古代の畑跡および土坑・溝が検出されている。土坑・溝は畑跡よりも新しく、微量ながらも土師器・須恵器が出土していることから、周辺に生産の場以外の集落等の存在が示唆される。B地区は古墳時代、古代、中世の遺構・遺物が検出されている。古墳時代では5世紀代の土師器と湧水点状の遺構が検出されており、住居跡が未検出であるものの小規模な集落が存在したと推測される。古代では溝と土師器片が存在し、本地区の南側に接している式内社鵜坂神社が古代においても当地に存在した可能性を少しだけであるが高めたものと思われる。中世では掘立柱建物・井戸などが検出されている。遺構・遺物は主に本地区の南部に集中していたが、微量ながらも全域に認められることから小規模な集落が点在していたと考えられる。C地区は古墳時代、古代、中世の遺構・遺物が検出されている。古墳時代では建物跡の可能性のある方形周溝状遺構や土坑・溝が存在し、5世紀後半代に集落が存在していたと考えられる。古代では詳細な時期を特定するだけの資料は得られていないが、人為的に構築された溝と自然流路が存在する。中世では溝が存在するが詳細な構築時期は不明である。

富山市埋蔵文化財調査報告4

鵜坂（うさか）Ⅰ遺跡 発掘調査報告書

発行日　2005年９月30日
発　行　富山市教育委員会(埋蔵文化財センター)
〒930-0803
富山市下新本町５-12
Tel.076-442-4246
Fax.076-442-5810
E-mail:maizoubumka-01@city.toyama.lg.jp
編　集　山武考古学研究所
千葉県成田市並木町221番地
印　刷　(株)文化総合企画
Tel.0476-93-0593